5.11.
あずまとしょかん

近代文学のあらまし

墨田区教育委員会

墨田区立あずま図書館
〒131-0044 墨田区文花1丁目19番1号

ア
105

精神上の近代　抑圧されてきた人間・個人・個性を大切にする。いわゆる近代的自我のめざめによる　個人主義・自由主義のまえ方が強くあらわれてきた時代

ルネサンス・　十四世紀末ー十六世紀初頭にかけて、全ヨーロッパにひろがった。

（文芸復興）　文芸・文化上の革新運動

キリスト教思想　来世的・禁欲的・非人間的な束縛

ギリシア精神ー人間本位　肉体的

現実的

享楽的　この思想に生きることは、人間の再興

個人的

自然的　十九世紀　浪漫主義運動

科学的　（個人を重んじ　個我を確立）

日本の近代　封建制度が崩壊した明治以後

政治上の近代　中央集権的法治国家の世代　明治22年（1889）　帝国憲法の発布

明治23年（1890）　教育勅語のかん発

ドイツ　国権主義

フランス　自由民権

経済上の近代　封建時代の土地経済にかわる資本主義経済

物質的・機械的文明の性急な輸入・諸制度の改革

いびつな近代　外面的　近代的国家

（不均衡な）　内面的　近代的精神の伸長阻害

「近代」ー「現代」

（ヨーロッパの思潮）

ギリシア精神ーキリスト教精神ー文芸復興ー古典主義ー啓蒙主義ー浪漫主義ー自然主義ー象徴主義

（日本近代百年の文芸思潮）

啓蒙主義ー写実主義ー浪漫主義ー自然主義ー象徴主義ー反自然主義（鷗外・漱石）ー「白樺」派ー耽美派ー新現実派ープロレタリア文学派ー新感覚派ー戦後派

（明治前期）

明治戯作者　翻訳小説

①啓蒙思想家（　　）写実主義

反近代の人　政治小説

②坪内逍遙　③二葉亭四迷

早稲田文学

④森鷗外　しらがみ草子

泉鏡花

尾崎紅葉　小栗風葉

⑥幸田露伴（伝統的・東洋的）

徳田秋声　我楽多文庫

③硯友社

中

山田美妙

広津柳浪　永井荷風

川上眉山

後谷卜支

⑦ 樋口一葉

治

⑧ 浪漫主義 ― 北村透谷
島崎藤村
星野天知
馬場孤蝶
上田 敏
高山樗牛

文学界

⑨ 民友社 ― 徳富蘆花
― 国木田独歩
― 徳富蘇峰

明

⑩ 社会主義文学 木下尚江

⑪ 写生文 ― 正岡子規
高浜虚子
夏目漱石
― 長塚 節

ホトトギス

（ 明 治 後 期 ）

⑫ 自然主義 ― 小説 ― 小杉天外 ― 広津和郎
島崎藤村 ― 宇野浩二
田山花袋
徳田秋声
正宗白鳥
岩野泡鳴
真山青果

― 評論 ― 島村抱月
長谷川天渓
相馬御風
田山花袋

早稲田文学

文章世界

（あそびの文学）

― 森 鷗外 ― 耽美派

木下杢太郎
永井荷風
谷崎潤一郎
佐藤春夫

スバル （鷗外系）

三田文学 （荷風系）

＊頽廃派

唯美主義
耽美主義
悪魔主義

永井荷風
谷崎潤一郎

（人生主義）

- 森田草平
- 鈴木三重吉
- 寺田寅彦
- 野上弥生子
- 芥川竜之介
- 久米正雄

（低回趣味）

- 夏目漱石
  - 小説
  - 随筆

（余裕派）

正　）

⑬ 反自然主義

- 白樺派
  - （人道主義）
    - 小説
      - 武者小路実篤
      - 志賀直哉
      - 有島武郎
      - 里見　淳
      - 長与善郎
    - 詩
      - 白樺
      - 千家元麿
      - （高村光太郎）
    - 短歌
      - 木下利玄
    - 戯曲
      - 倉田百三

（大

- 理知派
  - （新現実主義）
    - 芥川竜之介
    - 菊地　寛
    - 久米正雄
    - 山本有三

新思潮　（東大系）

⑭ 私小説・心境小説

- 自然主義系
  - 葛西善蔵
- 白樺系
  - 志賀直哉

⑮ プロレタリア文学

- 文戦派
  - 葉山嘉樹
  - 平林たい子
  - 青野季吉
- 戦旗派
  - 小林多喜二
  - 徳永　直
  - 宮本百合子
  - 中野重治
  - 蔵原惟人

文芸戦線（文戦）

戦　旗

⑯ モダニズム

- 新感覚派
  - 横光利一
  - 川端康成
- 新興芸術派
  - 舟橋聖一
  - 井伏鱒二
- 新心理主義派
  - 堀　辰雄
  - 伊藤　整

文芸時代

⑰ 大衆文学

- 吉川英治
- 大仏次郎
- 三上於菟吉
- 菊池　寛
- 久米正雄
- 獅子文六

ー高見　順　　ー野間　宏
丹羽文雄　　徃名麟三
島木健作　　大岡昇平
石川達三　　三島由起夫
⑱ 昭和10年代　ー　石坂洋次郎　　⑲ 戦後　ー　武田泰淳
尾崎一雄　　堀田善衛
太宰　治　　田宮虎彦
ー火野葦平　　井上　靖

大衆文学

広　義　大衆の趣味にうったえる通俗的な文学

狭　義　歴史的世界に取材した　ー　「時代もの」「まげもの」

※大衆　階級観がない

※民衆　民衆芸術ー第四階級・プロレタリアートを意味する階級性の潜在。

※江戸文芸ー町人の文学

大正末年　時代ー通俗歴史小説
　　通俗現代小説

Popular

寄席口演の落語・講談
三遊亭円朝（牡丹燈籠ー明治十七年）ー（江戸落語）
芝居噺作者　二代目
人情噺作者　ー三遊亭伯円ー世話講談

◎新聞に講談連載（民権講釈）

平民社　社会主義者　1　「平民講談」1　「社会講談」として育った

中里介山　「大菩薩峠」1　大正二年都新聞連載

大阪朝日・大阪毎日（大正4年10月10日）

夕刊　東京朝日（大正10年2月1日）　マスコミ的傾向。講談は夕刊に連載され夕刊の読物となる。

東京日日（大正12年9月18日）

雑誌　講談社　「講談倶楽部」明治44年11月刊　歴史小説

博文館　「講談雑誌」大正4年4月刊　新講談

菊池　寛　「作家が書きたくて書いているのが純文学で、人を悦ばすために書いているのが大衆文学だ。」

「自分が書きたくて書いているものが、自然に読者を悦ばし、人を悦ばすために書いているものが自分を満足させるようになれば、両方とも堂に入ったもので、純文学も大衆文学もその間の隔たりは、いくばくもない」

大正デモクラシー　民衆文芸的主張

「素材分類」

1歴史小説　時代小説・股旅小説。

2恋愛小説　悲恋より恋の成就。

3探偵小説　「捕物帖1時代的背景」忍法小説・忍者もの。

4ミステリー　複雑な人間関係と謀略・政治的・外交的・国際的陰謀・秘密結社・怪談・罪悪等の不可解ななぞがからみあっている。

5推理小説　③と④に深い関連がある。素材に焦点を置くか、作だけの道すじに焦点を置くかによって分けられる。

6冒険小説　探険物語・海洋物語・登山物語・西部もの。

7科学小説　宇宙世紀の発足により進渉する。

8怪奇小説　特殊な素材。

9 社会小説　個人性より社会性・社会主義に重点。
10 家庭小説　家庭にまつわる悲喜劇。
11 政治小説　政治が小説作品を借りて述べられる。
12 風俗小説　人間の個性よりも風俗を表面に押し出す。
13 スポーツ小説　スポーツの大衆的魅力に素材を求める。
14 戦争文学　戦場という限界条件の裡での人間性の追求が高次になれば一純文学。
◎戦闘に寄せる素朴な興味に頼った素材主義の作品
15 ユーモア小説　素材・構成の方法に関与。

石坂洋次郎　青い山脈
泉鏡花　婦系図
井上靖　氷壁
岩下俊作　無法松の一生
江戸川乱歩　二銭銅貨
岡本綺堂　半七捕物帖
尾崎紅葉　金色夜叉
尾崎士郎　人生劇場
大仏次郎　赤穂浪士・鞍馬天狗
海音寺潮五郎　武将列伝
川口松太郎　愛染かつら・鶴八鶴次郎
菊地幽芳　己が罪
岸田国士　暖流

黒岩重吾　背徳のメス
源氏鶏太　三等重役
小島政二郎　円朝
五味康祐　柳生武芸帳
五味川純平　人間の条件
今東光　春泥尼抄・東光太平記
坂口安吾　不連続殺人事件
佐々木邦　愚兄賢弟
佐々木味津三　旗本退屈男
獅子文六　自由学校
司馬遼太郎　竜馬がゆく
柴田錬三郎　眠狂四郎無頼控
子母沢寛　父子鷹

田岡典夫　権九郎旅日記
高垣眸　快傑黒頭巾
立野信之　叛乱
田村泰次郎　肉体の門
徳富蘆花　不如帰（ほととぎす）
中里介山　大菩薩峠
野村胡堂　銭形平次捕物控
長谷川伸　瞼の母
浜本浩　浅草の灯
菊池寛　真珠夫人
林不忘　丹下左膳
火野葦平　麦と兵隊
藤沢恒夫　新雪
松本清張　日本の黒い霧

三上於菟吉　雪之丞変化
水上勉　雁の寺
村上元三　佐々木小次郎
山田風太郎　甲賀忍法帖
山手樹一郎　夢介千両みやげ
山本周五郎　樅の木は残った・青べか物語
山本有三　女の一生
吉屋信子　良人の貞操
三角寛　瀬降と山刃
山岡荘八　徳川家康
吉川英治　宮本武蔵・新平家

石坂洋次郎

明治三十三年（一九〇〇年）一月二十五日　青森県弘前市田代町生。父忠次郎　母トメ　男兄弟三人の中の次男である。家業は古着・質商であった。

明治四十年弘前市立朝陽小学校入学、五・六年生のころ、雑誌を作り、少年小説の冒険小説を連載した。―小説の書きはじまりであった。大正二年四月県立弘前中学校入学、病弱であったが、上級生になったころから、小説類を読み漁り、長田幹彦ばりの小説を地方新聞に投稿したこともあった。大正五年十六歳の時、時事新報社発行の「少年」八月号に俳句が選外秀逸に掲げられた。大正六年四月号に「山と湖」―八郎潟と岩木山の伝説―が掲載され入賞した。

大正七年三月中学卒業　慶応義塾大学理財科受験失敗―両親のすすめで受験―一年間神田の正則予備校に通学、両親の反対を押し切って同大学文科予科に入学した。大正十年四月予科修了、文学科の東洋文学専攻（国漢文）に進む。

大正十年十一月十一日　横浜聖書学院在学中の弘前市下土堤町、今井慶次郎氏長女うら子（十七歳）と結婚、大井町水神下に新居を構えた。大正十二年四月　長男信一氏が生まれた。家族を郷里に置き、芝区三田南寺町南台寺に下宿した。大正十二年六月、同郷の先輩作家葛西善蔵をはじめて鎌倉に訪れた。以後昭和三年七月善蔵の死去まで交渉がつづく。

大正十四年　三月　慶応大学文学部国文科卒業　処女作「海をみに行く」―稿了―昭和二年「三田文学二月号」発表

六月　青森県立弘前高等女学校奉職

大正十五年　九月　秋田県立横手高等女学校転任

昭和　四年　四月　県立横手中学校転任

昭和十三年十一月　依願退職

昭和十四年　三月　一家をあげて上京　大田区田園調布四の二〇に住居を定め　文筆生活にはいる。

昭和十六年　八月　文芸家協会評議員

〃　十二月　大東亜戦争　陸軍報道班員としてフイリピン派遣

昭和十七年十二月　帰国

昭和十八年　三月　大本営報道部から占領地行政視察の名目でフィリピン再派遣
十八年　九月　帰国　十月郷里弘前市の夫人の実家へ疎開
昭和二十年　八月　終戦　十二月家族上京　弘前市本町で別居生活をはじめる。
二十一年九月　上京　大田区田園調布四丁目一八一番地に転住した。昭和二十五年同町四の一九〇転居

昭和　二年　二月　海をみに行く　「三田文学二月号」
三年　三月　キャンベル夫人訪問記　「三田文学五月号」
四年十一月　外交員　「文芸春秋」十一月号
八年　五月　若い人（一四〇枚）　「三田文学」五月号
〃（八〇枚）
九年　〃　十月、十一月、十二月
〃　「三田文学」一、二、五、六、七、八、九月号
九年　馬骨団始末記　改造十一十二月号
十一年十二月　若い人　「三田文学」十二月号
十二年　〃　「三田文学」一、三、四、五、六、七、八、十、十一、十二
「若い人」。改造社から単行本として正続編刊行
十四年　一月
十五年　暁の合唱　主婦之友連載
十六年　一月
十六年　何処へ　改造社「大陸」八―十二月号
二十二年　馬車物語　日本小説六、七月号
干ぐるま　「オール読物」秋の小説祭号

	青い山脈	六月ー九月　朝日新聞連載
二十三年	長編「女の顔」	主婦之友一月ー二十四年八月号
二十四年	石中先生行状記	小説新潮一月ー二十四年五月号
二十四年	山のかなたに	読売新聞連載
二十五年	続石中先生行状記	小説新潮一ー十二月号
二十六年	母の自画像	婦人倶楽部四ー二十八年十二月号
二十七年	丘は花ざかり	朝日新聞一月一日ー七月十五日
二十九年五月十日	渡米	留学中の長男信一氏とともに英、独、仏、伊を巡遊
二十九年八月七日	帰国	
三十年	長編「白い橋」	婦人倶楽部一月ー三十一年三月号
三十一年	山と川のある町	朝日新聞五月ー九月
	陽のあたる坂道	十二月ー三十二年十月
三十三年七月	若い川の流れ	週刊明星十月完
三十三年十一月	あじさいの歌	中部日本・西日本・北海道新聞に連載三十四年十月完。
三十五年九月	あいつと私	週刊読売　三十六年三月完。
三十六年一月	河のほとりで	毎日新聞　十二月完。
三十七年十一月	光る海	朝日新聞　三十八年十一月完。

津軽の生んだ作家

葛西善蔵

太宰治　現世逃亡流寓の経歴

石坂洋次郎

市民社会に於ける平凡で地味な経歴

「若い人」「麦死なず」の中で左翼運動における観念と現実のずれを執ように追求している。これは、観念的な生き方に反発して、肉体に即して物を考えようとする作者石坂洋次郎の健全な常識を物語っている。明るさ、ユーモア、庶民的正義感ー大衆性を必要とする通俗小説にとって不可欠のものである。陰湿な日本風土の殻を打ち破って伸びんとする青春の生命への賛歌である。ー健康な市民文学

「物は乏しいが、空は青く、雪は白く、林檎は赤く、女達は美しい国である。」

「いつの間にか六十歳を越してしまった。わら草履をはいて山野をかけめぐって遊んだ子供のころから今日まで、私はずっと、自分でないものの意志にあやつられて、フラフラとここまで押し流されて来たような気がしている。」

（石坂洋次郎集（講談社版「日本現代文学全集86」）

……読者を意識におきすぎた文学　　戯作味（健康な常識）

……ローカルな野趣味　郷愁　　（ユーモアを超えた風刺）

新聞小説について　（昭和二十七年七月）

今日の新聞小説というものは、年齢的にも身分的にも、広範囲の読者に読みこなせる性質のものでなければならない。しかも卑俗に流れず、読者大衆の志操を向上させる使命を果さなければならない。……将来また、漱石や藤村のような、純粋度を保った小説が、大新聞に連載される日が必ず来ると思う。それは何時かというと、いい政治が布かれ、国民も努力して、社会や個人の生活が、経済的にも精神的にもずっと豊かになり、国民の教養の程度が上も下も大差なくなるという日である。そして、私は、私共がいま書いている新聞小説は、そういう国家、社会を実現するために、読者大衆に、有形無形の暗示と激励を与える、過渡的な役目を果すことが出来れば十分だと考えている。私は終戦後三編の新聞小説を書いているが、いつもそういう趣旨で筆を執ってきた。将来も同じであろう。」

※　戦後の無秩序に解放された混乱の社会に、新しい風習と社会常識を確立する倫理性の創造

映画主題歌

山のかなたに　あこがれて
旅の小鳥も飛んで行く
涙たたえた　やさしの君よ
行こよ　緑の丘　こえて

―山のかなたに！

若く　あかるい　歌声に
雪崩は消える　花もさく
青い山脈　雪割桜
空のはて
今日も　われらの　夢を呼ぶ

古い上衣よ　さようなら
さみしい夢よ　さようなら
青い山脈　バラ色雲へ
あこがれの
旅の乙女に　鳥も鳴く

雨にぬれてる　焼けあとの
名もない花も　ふり仰ぐ
青い山脈　かがやく横の
なつかしさ
見れば涙が　またにじむ

父も夢見た　母も見た
旅路のはての　そのはての
青い山脈　みどりの谷へ
旅をゆく
若いわれらに　鐘が鳴る。

尾崎士郎

一八九六年（明治三十一年二月五日）生　一九六四年（昭和三十九年二月十九日）没

・愛知県幡豆郡横須賀村（吉良町）尾崎嘉三郎の三男として出生。

・代々、辰己屋で、煙草製造業、のち官営に移管して、父は新設の三等郵便局長となる。

・明治四十三年　愛知県立第二中学校（現岡崎高校）入学、在学中「失楽園」の訳者、後の文博、繁野天来が英語を担当。その知遇を得て文学に目覚める。

早大教授永井柳太郎の選になる懸賞論文が第一位に当選し、早大進学の決意がかたまる。

・大正五年　早大政治科高等予科入学大正六年早大学校騒動（高田・天野両派対立　大隈夫人銅像）に巻き込まる。

この時知己を得た石橋湛山（後の首相）の好意で東洋経済新報社にアルバイトとして入社。

大正　七年　長兄自殺　一家没落　堺栢川　山川均　高畠素之などの「売文社」に入社。

大正　八年　早大政治科二年中退

大正　九年　売文社が分裂、毎夕新聞に入社、三ヶ月で退社。※高畠素之（マルクス資本論翻訳）の食客となる。高畠の人間的な影響を受ける。

大正　十年　時事新報の懸賞小説に「幸徳修水一派」の大逆事件に取材した「獄中より」を応募、二位に当選。

高畠指導のもとに「近世社会主義発達史論」を上梓、改造社の社長山本実英の認めるところとなり、その委嘱により長編小説「逃避行」を執筆、改造社より刊行。

大正十一年　山本社長のすすめで、上海蘇州に旅行。「獄室の暗影」改造三月　発表するも、前記「逃避行」ともに不評に終わり山本社長不興を買う。　後　千葉県御宿海岸の寺に逼塞して貧困と闘う。

大正十二年　「時事新報」入選仲間の宇野千代と結婚し、東京府荏原郡馬込村（現太田区馬込）に住む。

昭和　二年　「時事新報」に新聞小説「世紀の夜」を連載し文学活動のいとぐちを得る。

昭和　五年　宇野千代と離婚し、古賀清子と結婚。
昭和十二年　日支事変　華北に赴き「悲風千里」（中央公論十二・十）を発表
昭和十三年　漢国攻略戦従軍「ある従軍部隊」（中央公論十三・二）
黄河・包頭　発表作品「成吉思汗」（新潮社十五・七）
昭和十六年　十一月、陸軍報導班員徴用　フィリピン上陸「朝暮兵」（改造十八・六）
昭和十七年　マニラで胃潰瘍　十七・十一　帰還
昭和十九年　伊東市に疎開
昭和二十三年　追放令
昭和二十五年　解　除
昭和二十九年　太田区山王に転居
昭和三十九年　二月十九日死亡　旧友今東光が戒名をおくる「文光院殿士豪雄大居士」
二月十八日「文化功労者」として顕彰さる。

高杉晋作　昭和十六・八―十一　朝日新聞
天皇機関説　昭和二十六・十　文芸春秋
厭世立志伝　昭和三十二　中央公論社
新・人生劇場　昭和三十八　中央公論社
遠き跫音　昭和三十九　中央公論社
小説四十六年　昭和三十九　講談社
一文士の告白　昭和三十九　新潮社

「創作活動活発」　再婚前後

鶺鴒の巣　「新潮」　昭和二・九
「荏原郡馬込村」「新潮」　昭和三・九
悲劇を探す男　「中央公論」昭和四・一
青い酒場　「新潮」　昭和七・九

「個人雑誌」（没落時代）「昭和四年」
全盛の左翼文学に対抗し、インテリが没落するものならば、よろしく、その没落の感情に誇りを持つべきだと主張し、同時に、無功利の熱情といったものに打ち込む。その情熱追求を作品の上で試みたが、「人生劇場、青春篇」を昭和八年に書くまでは、作品方向に安定を欠いた。

「文学的態度」
久しく、士郎の内部に巣食っていた近代的意識過剰を清算し、長いあいだ隠されていた政治家的気質に根ざす本来の単純さや人間味を生かし、そこに、人間味あふれる独得な世界を展開させた。

正義派的侠義　青成瓢吉
車嘉七

人生劇場
青春編　都新聞（東京新聞）昭和八・三―七
中川一政　画
川端康成が激賞（読売新聞誌上）してベストセラーとなる。
愛欲編　都新聞　昭和九
残侠編　都新聞　昭和十一
風雲編　都新聞　昭和十四

離愁編　東京新聞　昭和十八
夢幻編　小説と読物　昭和二十二
望郷編　オール読物　昭和二十六
蕩子編　小説新潮　昭和三十四

昭和十二年春　佐藤惣之助作詩　古賀政雄作曲　テイチクレコード

① やると思えば　どこまでやるさ
それが男の魂じゃないか
義理がすたれば　この世は暗だ
なまじ　とめるな　夜の雨

② あんな女に　未練はないが
なぜか涙が　流れてならぬ
男ごころは　男でなけりゃ
わかるものかと　あきらめた

③ 時世　時節は変ろとままよ
吉良の仁吉は　男じゃないか
おれも生きたや仁吉のように
義理と人情の　この世界

島崎藤村

昭四十二　「文学」教材

生		歳	
明治五	一八七二	一	三月二十五日　長野県西筑摩郡神坂村馬籠に島崎正樹の四男として生まれた。本名は春樹。
一四	一八八一	一〇	兄友弥と上京、京橋鎗場町の姉園子の嫁ぎ先、高瀬家から泰明小学校に通う。
一六	一八八三	一二	銀座四丁目吉村方に移る。
一七	一八八四	一三	海軍省官吏石井共吉について英語を学ぶ。
一九	一八八六	一五	父死す。三田英学校入学。
二〇	一八八七	一六	共立学校へ移り、九月　明治学院普通学部本科一年入学
二一	一八八八	一七	台町教会で、木村熊二から洗礼を受ける。
二四	一八九一	二〇	明治学院卒業　横浜の吉村氏の店を手伝う。
二五	一八九二	二一	「女学雑誌」に寄稿、明治女学校の教師となる。北村透谷を知る。　「佐藤輔子」
二六	一八九三	二二	一月教師を辞し、関西放浪、秋帰京。一月「文学界」創刊
二七	一八九四	二三	四月、再度、明治女学校奉職　※死亡
二八	一八九五	二四	八月教職を辞す
二九	一八九六	二五	九月東北学院教師として仙台へ赴く。母縫子死亡。
三〇	一八九七	二六	七月東北学院を辞して帰京「若菜集」発行ー（八月）
三一	一八九八	二七	東京音楽学校選科ピアノ科入学　一月「文学界」終刊。　「一葉舟」六月発行
三二	一八九九	二八	小諸義塾教師となる　秦冬子と結婚
三三	一九〇〇	二九	「千曲川のスケッチ」に着手　「橋　糸重」　「夏　草」十二月発行
三四	一九〇一	三〇	八月「落梅集」発行　（七月木曾福島　高瀬家滞在中詩稿）
三五	一九〇二	三一	十一月最初の小説「旧主人」発表　掲載誌「新小説」発禁

明治三七　一九〇四　三三　九月「藤村詩集」発行　「破戒」に着手
三八　一九〇五　三四　四月小諸を辞して上京、西大久保四の五に住み、三女を失ない。長男楠雄生まる。
三九　一九〇六　三五　三月「破戒」出版、次女　長女死亡。
四〇　一九〇七　三六　第一短篇集「緑葉集」出版。次男鵬二生まる。　十月浅草新片町に移る（台東区柳橋二丁目）
四一　一九〇八　三七　四月「春」を東京朝日新聞に連載。三男翁助生まる。
四三　一九一〇　三九　一月「家」を読売新聞に連載。四女柳子生まれ、八月妻冬子死亡。
四四　一九一一　四〇　「家」出版
大正　元　一九一二　四一　十二月「千曲川のスケッチ」刊行
二　一九一三　四三　三月芝二本榎西三に移る。四月フランスへ出発。
五　一九一六　四五　七月フランスより帰国。
六　一九一七　四六　四月童話集「新き者に」刊行
七　一九一八　四七　五月「新生」を東京朝日新聞に連載。十月麻布飯倉片町に移る。
八　一九一九　四八　「桜の実の熟する時」「新生」刊行
一一　一九二二　五一　「藤村全集」十二巻刊行
昭和　元　一九二六　五五　「嵐」発表
二　一九二七　五六　次男鵬二と山陰を旅行「分配」発表
三　一九二八　五七　加藤静子と結婚
四　一九二九　五八　「夜明け前」連載し始む（中央公論年四回）
七　一九三三　六一　「夜明け前」第一部完成　新潮社
一〇　一九三五　六四　「夜明け前」第二部完成
一一　一九三六　六五　七月国際ペンクラブ大会出席のためアルゼンチンへ赴き、米国から欧州へ旅行。
一二　一九三七　六六　一月帰朝　麹町下六番町の新居へ移る。

一五　一九四〇　六九　帝国芸術院会員となる。
一六　一九四一　七〇　神奈川県大磯の別邸に住む。
一八　一九四三　七二　一月「東方の門」を「中央公論」に連載始む。八月二十二日死去。

浪漫主義

詩

1　若菜集　三十年八月
2　一葉集　三十一年六月
3　夏草　三十一年十二月
4　落梅集　三十四年八月

散文（習作期）

「千曲川のスケッチ」
※藤村詩集　三十七年九月
「旧主人」三十五・十一　新小説
「藁草履」　明星　老嬢　三十六・六　太陽
「爺（おやじ）」三十六・一小天地　水彩画家　三十七・一　新小説

自然主義

小説

「破戒」　三十八・十一脱稿　三十九・三出版

○若菜集

明治三十年八月二十九日刊　春陽堂版

明治二十九年の秋より三十年の春にかけて　こころみし　根無草の色も香もなきを　とりあつめて若菜集とはいふなり、このふみの世にいづべき日は青葉のかげ深きころになりぬとも、そは自然のうへにこそあれ、吾歌は　まだ萌え出しまゝの若菜なるをや。

＊六人の処女＊　1　どれも第一節を記載。

うすごほり

おえふ

処女ぞ経ぬるおぼかたの
われは夢路を越えてけり
わが世の坂にふりかえり
いく山河をながむれば

おきぬ

みそらをかける猛鷲の
人の処女の身に落ちて
花の姿に宿かれば
風雨に渇き雲にうえ
天かけるべき術をのみ
願ふ心のなかれとて
黒髪長き吾身こそ
うまれながらの盲なれ

おさよ

潮さみしき荒磯の
巖蔭われは生れけり
あしたゆふべの白駒と
故郷遠きものおもひ
をかしくものに狂へりと
われをいふらし世のひとの
げに狂はしの身なるべき
この年までの処女とは

おくめ

こひしきまゝに家を出で
ここの岸よりかの岸へ
越えましものと来て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ

おつた

花ほの見ゆる春の夜の
すがたに似たる吾命
おぼろおぼろに父母は
二つの影と消えうせて
世に孤児の吾身こそ
影より出でし影なれや
たすけもあらぬ今は身は
若き聖に救はれて
人なつかしき前髪の
処女とこそはなりにけれ

おきく

くろかみながく
やはらかき
をんなごころを
たれかしる
をとこのかたる
ことのはを
まことととおもふ
ことなかれ

草枕

①夕波くらくなく千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

⑨道なき今の身なればか
われは道なき野を慕い
思い乱れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

⑩心の宿の宮城野よ
乱れて熱き吾身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

⑪ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聴き
悲しみ深き吾目には
色彩なき石も花と見き

⑫あゝ孤独の悲痛を
味ひ知れる人ならで
誰にかたらむ〻の日の
かくもわびしき野のけしき

「こひぐさ」

其一、初　恋

①まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

其二、狐のわざ　其六、いきわかれ
其三、強　敵　其七、蓮花舟
其四、東西南北　其八、逃げ道
其五、四つの袖　其九、日光

○一葉舟　明治三十一年六月十五日刊　春陽堂版

かの頃是なき小児が一葉の舟を水の流れに浮べて、遊び戯るるに等しければ、とりてこのふみに名くることゝはしぬ

※若菜集　女性的　感傷的
※一葉舟　男性的　雄渾　悲壮　（鷲の歌）

○夏草　明治三十一年十二月六日刊　春陽堂版

保福寺峠　鳥居峠を越えて木曾に入りしはこの夏七月の中旬なりき。福島の高瀬氏はわが姉の嫁ぎたるところにて、…（以下略）…古人がわが詩を作るは自己をむちうつなりといへる言の葉の甚深なるを嘆ぜずんばあらず。夏草はわが自ら責むるの児にすぎざるのみ。

鷲の歌

②とくたちかへれ夏波に友よびかはす浜千鳥
もしほやく火は消えはてて岩にひそめるかもめどり
あまは苔やに舟は磯いそうちよする波ぎはの
削りて高き巖角にしばし身をよす二羽の鷲

⑮霜ふりかかる老鷲の一羽をくはへ眺むれば
夏の光にてらされて岩根にひゞく高潮の
砕けて深き海原の巖角に立つ若鷲は
日影にうつる雲さして行くへもしれず飛ぶやかなたへ

農　夫

序

利根川のほとりにて

一の声

見ようるわしく照る月の
緑にけぶる夜のひかり
見よゆるやかに行く水の
流れは深き利根の河
花さきにほふ川岸に
光彩を宿す青草の
茂れるかたの静けさは
眠のごとく見ゆるかな

四　林の中

農　夫

時はせまりぬ利根川の
水の流れに舟浮けて
都のかたに行く人を
はや岸の辺に待つならむ
㊫かなしみ㊫今は我
すでに心を定めたり
これより遠きもろこしの
軍の旅に行くべきそ

むすめ

けふ別れてはいつかまた
相逢ふまでの名残りぞや
あゝ人去りて鳥なかば
鳥の行くへに花さかば
花の色香によそへつつ
なれにし岸の青草の
上にすわりて汝がため
幸あれかしと祈らなむ

○　落　梅　集

明治三十四年八月二十五日刊　春陽堂版

……客心慰めかねし折々書き綴りなとしけるをとりあつめて　落梅集といふは。浅間山のふもとなる鄙のしらべといふこころを名け、また一つには千曲川に散り浮く梅の花の水に流れて香は僅に残りたる旅の思を尽くさんとてなり。

「千曲川旅情の歌」

旅　情

一　小　吟

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ

昨日またかくてありけり
今日もまたかくてありけり

胸より胸に

其一　罪なれば　物のあはれを

緑なすはこべは萌えず
若草もしくによしなし
しろがねのふすまの岡辺
日に溶けて淡雪流る

あたたかき光はあれど
野に満つる香も知らず
浅くのみ春は霞みて
麦の色わづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

この命なにをあくせく
明日をのみ思ひわづらふ

いくたびか栄枯の夢の
消え残る谷に下りて
河波のいざよふ見れば
砂まじり水巻きかへる

嗚呼古城なにをか語り
岸の波なにをか答ふ
過し世を静かに思へ
百年もきのふのごとし

千曲川柳霞みて
春浅く水流れたり
ただひとり岩をめぐりて
この岸に愁を繋ぐ

① 罪なれば　物のあわれを
こころなき身にも知るなり
罪なれば酒をふくみて
夢に酔ひ夢に泣くなり

④ 罪なれば　滅び砕けて
常闇の地獄のなやみ
嗚呼二人抱きこがれて
恋の火にもゆるたましひ

其二　めぐり縫ふ　君やいくたび

① めぐり縫ふ君やいくたび
あぢきなき夜を日にかへす
吾命暗の谷間も
君あれば恋のあけぼの

其三　ああさなり　君のごとくに
其四　思より　思をたどり
其五　吾恋は河辺に　生ひて
其六　吾胸の　底のこころには
其七　君こそは　遠昔に響く

労働雑詠

其一　朝

①朝はふたたびここにあり
朝はわれらと共にあり
埋れよ眠行けよ夢
隠れよさらば小夜嵐

②諸羽うちふる鶏は
咽喉の笛を吹き鳴らし
けふの命の戦闘の
よそほひせよと叫ぶかな

③野に出でよ野に出でよ
稲の穂は黄にみのりたり
わらじとく結へ鎌も執れ
風にいななく馬もやれ

④
…
⑮

其二　昼

①

②誰か知るべき小山田の
稲穂のたわに実るとき
花なく香なき賤の胸
生命をとりて馨くとは

③共に来て蒔き来て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野辺の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稲の穂を

④
…
⑫

其三　暮

揚げよ勝どき手を延べて
稲穂を高くふりかざせ
日暮れ労れて道の辺に
倒るる人よとく帰れ

（中　略）

海　草

其一　の歌

其二　椰子の実

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の実一つ
故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月
旧の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる
われもまた　なぎさを枕
孤身の浮寝の旅ぞ
実をとりて胸にあつれば
新なり流離の愛
海の日の沈むを見れば
激り落つ異郷の涙
思ひやる八重の汐々
いづれの日にか　国に帰らん

其三　蟹のなげき

其四　浦　島

其五　舟　路

○藤村詩集　明治三十七年九月四日刊　春陽堂版

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。
そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の予言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。
（中　略）
新しきうたびとの群の多くは、ただぼく実なる青年なりき。その芸術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた偽りも飾りもなかりき。（中　略）また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の年々をして狂せしめたるを。
われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの声に和しぬ。
詩歌は静かなるところにて想ひ起したる感動なりとかや。げに　わが歌ぞ　おぞき苦闘の告白なる。
（中　略）
生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなわち新しき生涯なり。
われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。
芸術はわが願ひなり。されどわれは芸術を軽く見たりき。むしろわれは芸術を第二の人生と見たりき。
ああ　詩歌はわれにとりて自ら責むるのむちにてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かかるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。

○千曲川のスケッチ
「もっと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか。」
これは、私が都会の空気の中から脱け出して、あの山国へ行った時の心であった。
私は信州の百姓の中に行って種々のことを学んだ。田舎教師としての私は小諸義塾で町の商人や旧士族やそれから百姓の子弟を教えるのが勤めであったけれども、一方から言えば私は学校の小使からも生徒の父兄からも学んだ。到頭七年の長い月日をあの山の上で送った。私の心は詩から小説の形式を択ぶようになった。

この書の主なる土台となったものは、三・四年間ばかり地方に黙していた時の印象である。

島崎藤村（小説）

芭蕉の生涯は旅人の生涯であったばかりでなく、漂泊者の生涯であった。「漂泊の思ひやまず」と道の記の中に力強く書いてあったと思う。芭蕉にいこうとするものは、あの言葉の光をとらえることを忘れてはなるまい。

やがて死ぬ景色は見えずせみの声

この句は漂泊者の精神の光景を指摘して見せたようで、何となく胸に迫る。

芭蕉のこと…（春を待ちつつ）

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそわれて、漂泊のおもひやまず。」　奥の細道：芭蕉

＊感想・随筆集＊

「新片町より」（明治四十二年九月）　前篇
「浅草だより」　「後の新片町より」（大正二年四月）　後篇
「飯倉だより」（大正十一年）　麻布飯倉片町居住
「春を待ちつつ」（大正十三年）：「第二の飯倉だより」ともいわれる。
「市井にありて」（昭和五年）　「桃の雫」（昭和十一年）

破　戒　（明治三十九年三月「緑蔭叢書」第一篇　自費出版）

蓮華寺では下宿を兼ねた。瀬川丑松が急に転宿を思い立って借りることにした部屋というのは、その蔵裏つづきにある二階の角のところ。寺は信州下水内郡飯山町二十何カ寺の一つ、真宗に付属する古刹で、丁度その二階の窓により凭って眺めると、銀杏の大木を隔てて飯山の町の一部分も見える。

さすが信州第一の仏教の地、古代を眼前に見るような小都会、奇異な北国風の屋造、板葺の屋根、または冬期の雪除として使用する

特別の軒庇から、ところどころに高く頭れた寺院と樹木のこずえまでーすべて旧めかしい町の光景が香の烟の中に包まれて見える。ただ一際目立ってこの窓から望まれるものと言えば、現に丑松が奉職しているその小学校の白く塗った建築物であった。「第一章」

※　定本版藤村文庫ー「蓮華寺では広い庫裏の一部を仕切って下宿するものをおいていた。」

※　ルソー「懺悔録」　真実の告白　肉体（有限）ー霊（無限）「旅」

※　穢多ー新平民

寂しい晩秋の空に響いて、また蓮華寺の鐘の音が起った。それは多くの農夫の為に一日の疲労をねぎらうようにも、楽しい休息を促すようにも聞える。まだ野に残って働いている人々は、いずれも仕事を急ぎ初めた。今は夕もやの群が千曲川の対岸を籠めて、高社山一帯の山脈も暗く沈んだ。西の空は急に深い焦茶色に変ったかと思うと、やがて落ちて行く秋の日が最後の反射を田の面に投げた。向こうに見える杜も、村落も、遠く暮色に包まれて了ったのである。あゝ、何の煩いも思い傷むこと無くて、こういう田園の景色を賞することが出来たなら、どんなにか青春の時代も楽しいものであろう。丑松が胸の中に戦う懊悩を感ずる程、余計に他界の自然は活々として、身に染みるように思わるる。南の空には星一つ顕われた。その青々とした美しい姿は、一層夕暮の眺望を森厳にして見せる。丑松は眺め入りながら、自分の一生を考えて歩いた。　「第四章」

春

（明治四十一年一月から東京朝日連載・同年十月緑蔭叢書二篇刊行）

紅く泣きはれた岸本の頬はまず三人の心を動かした。彼の粗く剛い髪、大きな鼻、体軀の割合に幅の広い肩なぞは、寒い山国の生まれということを示している。傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病な、感じ易いと同時に思図々々したーこういうあわれむべき性質は彼の容ぼうを沈鬱にして見せる。彼と管とは同窓の友であった。

「旅費まで送って貰って済まなかったね。」と岸本はかしこまったように坐り直した。彼は有難いという面持で、なつかしい友達の前に手をついた。　「春」　の　三

※　三人　青木（北村透谷）二十六才　市川（平田禿木）二十一才　菅（戸川秋骨）「文学界」の人々。

※　岸本　（藤村）二十一才　　※　時　明治二十六年夏、東海道吉原の宿

それは最早八月の末で、毎年の氾濫を思わせるような季節であった。上野の停車場には東北行の汽車に乗り遅れまいとして、手荷物を提げたり、洋傘を持ったりした男女の旅客が多勢集まっていた。

中　略

発車の鈴の響き渡るころには、岸本はある三等室に陣取って、玻璃窓に近く腰掛けた。別に彼を見送る人もなかった。やがて車掌は相図の笛を吹いた。石炭の煙は雨の為にねて、窓の外を暗く通り過ぎた。汽車は動き始めた。　「春」　百三十二

※　主人公岸本　二十二歳から二十五歳までを描く

「樹の実の熟する時」　大正二年「文章世界」に発表

後半はパリで執筆、五年後に完成

明治二十年代を描く。

主人公岸本（十七歳から二十二歳まで）

捨吉は東海道を下って行った。こうして始まった流浪が進んで、行ったら終にはどうなるかというようなことは全く彼には考えられなかった。鎌倉から興津あたりまで歩いて行った。旧暦で正月を迎えようとする村々を通り過ぎた時は、途中でまた煤掃の音を聞いた一日一日と捨吉は温暖い東海道の日あたりの中へ出て行った。どうかするとその日あたりの中にさく名も知らない花を見つけて、せめて路傍の草花から旅人と呼ばるることを楽しんだ。　＊十二＊

※　芭蕉「笈の小文」「旅人とわが名呼ばれん初時雨」

※　二十一歳の暮に明治女学校を退職し、旅に出る。

「家」　上巻　明治四十二年一月から「読売新聞」

（旧名「犠牲」。）下巻　明治四十三年四月から「中央公論」

「緑蔭叢書」第三篇　明治四十四年十一月刊行

藤村の結婚生活と長姉高瀬園子

（小泉三吉）と（橋本種）両家の内を描く。

翌年の五月には、三吉夫婦はお房という女の子の親であった。書生はもういなかった。

手のない家のことで、お雪は七夜の翌日から起きて、子供のむつきを洗った。その年の初夏ほど、三吉も寂しい旅情を経験したことはなかった。奥の庭には古いリンゴの木があって軒に近い枝からは可れんな花がたれさがった。みつばちもきて楽しい羽の音をさせた。

すべての物のかたちは、初めて家を持った当時のありさまにかえってきた。
「おれの家は宿屋だ―お前は宿屋のおかみさんだ。」
「では、あなたはなんですか。」
「おれか。おれはお前に食い物をこしらえてもらったり、着物をせんたくしてもらったりする旅の客サ。」
「そんなこと言われると心細い。」
「しかし、こうして三度三度御飯をいただいているかと思うと、ありがたいような気もするネ。」
こんな言葉を夫婦はとりかわした。
ヒョイヒョイヒョイヒョイと夕方から鳴き出すかわずの声はよけいに旅情をそそるように聞える。
それを聞くと、三吉は堪えがたいような目つきをして、家の内を歩き回った。 ― 前編五章 ―

※ お房―明治三十三年五月出生　藤村の長女「緑」

「フランス帰り」　上巻　平和と巴里　　大正二年から四年まで「朝日新聞」
　　下巻　戦争と巴里

「海　へ」　　大正七年刊行

「海へ」
「地中海の旅」
「燕のごとく帰る」
「故国を見る迄」「故国に帰りて」

「新　生」　　大正七年から「朝日新聞」に連載　四十一歳から四十七歳まで
　　自己告白　宗教的懺悔

二年近くかかって育てた新しい言葉も延びてゆく時であった。彼は旅人らしく自分の周囲を見廻すと、きたるべき時代のためにせっせと準備しているようなもののあるのに気がついた。
彼の眼には、どう見てもそれは芽だ。間断なく怠りなく支度しているようなもののあるのに気がついた。彼の眼には、どう見てもそ

れは芽だ。間断なく息りなく支度しているような芽だ。それはかなりもう長いこと萌しに萌して来たものであるとも言える。けれども何人の骨髄にまでも浸み渡るような欧羅巴の寒い戦争がきて、一層その発芽力を刺激されたようにも見える。そうしたものが彼の周囲にあった。そしてその芽の一つとして、曾て一度は頽廃したものの再生でないものはなかった。「新生一部　百二十二節」

「短　　編」

「嵐」「分配」「伸び仕度」「熱海土産」「山陰土産」

「夜　明　け　前」

第一部　昭和四年四月より七年一月　中央公論連載

第二部　昭和七年四月より十年十月

父正樹（作中青山半蔵）の時代ー明治維新

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨づたいに行くがけの道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。

東ざかいの桜沢から、西十曲峠まで、木曾十一宿はこの街道に添うて、二十二里余に亘る長いけい谷の間に散在していた。道路の位置も幾度か改まったもので、古道はいつのまにか深い山間に埋もれた。

（中　　略）

この街道の変遷は幾世紀に亘る封建時代の発達をも、その制度組織の用心深さをも語っていた。鉄砲を改め女を改めるほど旅行者の取締りを厳重にした時代に、これほど好い要害の地勢もないからである。このけい谷の最も深いところには木曾福島の関所も隠れていた。

「巡　　礼」

昭和十二年五月より十一月まで「改造」に連載

昭和十五年二月　岩波書店から刊行

アルゼンチンのブエノスアイレスへ夫人ならびに有島生馬と出発

昭和十一年万国ペンクラブ大会に出席

北米から仏国へ廻って帰国　海外紀行　文明批評

路傍に道祖神なく、馬頭観音なく、一里毎に塚を築いて榎を植えた跡もなく、まして長途の旅人を慰めるような句塚もない。似て非なるものは、ここの「ウェーサイド」と吾国の街道筋とである。

長い歴史のあるわが国の宿駅や、伝馬制度や、あの五人組のようなものまでがここの旧い交通道路にも発達していたとは思はれない。

ここには近代的な設備の見るべきものはあるが、長い文化の積み重ねがない。

わが国には長い文化の積み重ねはあるが、まだまだ近代的な設備の見るべきものに乏しい。

巡　礼　北米雑記　四

「東　方　の　門」

昭和十八年「中央公論」の一・四・九・十月号発表

第三章五節　未完　マルセーユのロンシャン美術館のシャヴアンヌの絵から「東方の門」の題をとる。

昭和十八年八月二十二日　亡

石川啄木

明治一九　一　二月二十日、岩手県南岩手郡日戸（ひのと）村　曹洞宗日照山常光寺に生まれる。父石川一禎　母工藤かつ。戸籍は別であり、母の籍に入る。「戸主工藤カツ長男私生児、一（はじめ）」

二〇　二　父一禎　宝徳寺住職へ転出。旧暦三月六日北岩手郡渋民村に一家移住。

二四　六　四月　岩手県渋民　尋常小学校入学

二五　七　母　石川家に入籍「石川一禎養子一（はじめ）」工藤姓から石川姓（九月三日）

二八　一〇　三月　渋民小学校卒　首席の成績

四月　盛岡市立高等小学校入学　盛岡市仙北町四十四番戸の伯父工藤常象に寄宿。

三一　一三　三月二十五日　三年修了四年に進級　四月十八日　岩手県盛岡尋常中学校入試合格　四月二十五日入学百二十八名中　十番の成績

三二　一四　四月二年進級　平均八十点　クラス十番　学年中二十五番　士族　堀合忠操長女節子と知合う。

三三　一五　四月三年進級　クラス十四番　学年四十六番

十一月　及川吉志郎の紹介で、野村長一（胡堂）金田一京助（花明）ら文学青年と交わる。金田一から「明星」借用愛読者となる。

三四　一六　六月校名が県立盛岡中学校と改称　二月学校ストライキ　四年進級クラス三十六番　学年八十六番　節子との恋愛が進む。五月　丁二会解散　ユニオン会を組織。

三五　一七　足尾鉱毒事件・八甲田山雪中行軍遭難事件の号外を売り、義捐金を作り、災害民へ送る。

十月「明星」に短歌一首　白蘋（ひん）の名で載る。

七月十五日　数学期末テストに不正、答案無効の処分。

十月「家事都合」を理由に退学。月末上京。

十一月二日小石川区小日向台三の九三大館光方に止宿　十一月九日　城北倶楽部の新詩社の会合に出席、翌日渋谷

の与謝野鉄幹、晶子夫妻を訪れ歓談。

三六　一八　二月十七日父に伴われて帰郷療養。十二月一日「明星」（卯歳十二号）に「啄木」を用いる。

三七　一九　一月岩手日報に「講談一則」寄稿　在米詩人ヨネ野口を紹介　二月十日　日露開戦。

※十二月二十六日　父石川一禎宗費滞納のため曹洞宗の宗務院から住職罷免の処分を受ける。

十月末、処女詩集刊行のため上京。

三八　二〇　一家宝徳寺を退去ー三月二日　後日手紙でこの件を知り、煩悶する。

五月三日　詩集「あこがれ」（上田敏序　与謝野鉄幹　）刊行

五月十二日　啄木と堀合節子との婚姻を盛岡市役所へ父一禎が届け出る。

五月二十日　離京

六月四日　盛岡市帷子小路八番戸に新居を定める。四・半と八畳の借家。父・母・妹光子　新妻との五人

九月五日　「小天地」第一号発行　主幹　編集人　石川一　発行人　石川一禎

三九　二一　一月　父　青森県野辺地の師僧葛原対月の許に赴く。（生活難のため）

三月十日　母と妻とともに渋民村に帰る。妻の父を通じて岩手郡視学に郡内小学校就職を願い出る。

三月二十三日　父の特赦令通知受く。

△四月十日　父　帰港　代務住職中村義寛の住職継目願を撤回　父一禎の再住を願い出る。

四月十一日　岩手郡渋民尋常高等小学校に尋常科代用教員として採用され、十四日から勤務月八円。

四月二十一日　徴兵検査　筋骨薄弱で丙種合格　徴集免除

六月十日　十五日間の田植え休みを利用上京、千駄ケ谷の新詩社に滞在。漱石・藤村・小栗風葉の小説に刺激され帰郷後小説を書きはじめる。

七月三日　処女小説「雲は天才である」を執筆（十一月中旬　書きなおす）

十二月二十九日　妻実家で長女京子出生。

※石川一禎派と中村義寛派が対立して紛争する。

明治四〇　二二　老父　宝徳寺復帰を断念して家出ー三月五日。四月一日辞表提出。十九日ストライキ　二十二日免職。五月四日一家離散。母は知人宅に。妻子は実家に。五月五日妹とともに函館に到着。莫蒼社（ぼくしゅくしや）の人々に迎えられて、青柳町四十五番地松岡の下宿に入る。十一日より商工会議所の臨時雇となる。六月十一日函館区立弥生尋常小学校代用教員　月十二円。女教師　橘智恵子を知る。

八月二十五日　函館大火。九月十一日　校長に退職願提出。

九月十三日　札幌に着く、北門新報社校正係　九月二十七日　小樽日報に赴任　野口雨情と三面担当

十月二日　母　妻子と住む。

四一　二三　釧路新聞入社一月二十一日家族を小樽に残して単身赴任。三面主任なるも編集長待遇。二月十六日。釧路新聞・北門新報二社合同演劇会を釧路座に開催。自作シナリオ「無冠の帝王」に出演す。芸者小奴と交情深まる。四月五日単身海路函館に向う。四月二十二日友人宮崎郁雨（大四郎）の好意で家族を函館に移し、船旅で、上京。（故郷渋民村へのせつなさから）二十八日千駄ケ谷の新詩社に入る。

四二　二四　一月「スバル」創刊「小説　赤剌」　スバル二号「足跡」発表。二月二十四日　朝日新聞校正係入社。月二十五円夜勤手当一円。六月十六日　宮崎郁雨　母・妻子同伴で上京。本郷区弓町二の十八新井方に住む。十月妻書置き長女同伴で実家に帰る。十月二十六日妻上京。

四三　二五　六月「幸徳秋水」らの大逆事件　その後社会主義関係の書籍を愛読。九月三日本籍を渋民村から、本郷弓町二の十八に移す。九月十五日「朝日歌壇」に選者となる。十月四日長男真一出生。十月二十七日死亡。十二月一日　歌集「一握の砂」発行

四四　二六　一月　埼玉の文学青年谷静淵から米国で秘密出版した革命叢書第一編クロポトキン著「青年に訴ふ」の寄贈を受け愛読。六月三日妻の実家堀合家に絶縁宣告。（妻帰省問題）

七月　高熱発す　妻節子も発病　父一禎　家出ー九月三日。

四五　二七　一月　母喀血。三月七日母死亡。四月七日ごろ父一禎室蘭から上京　四月十三日父妻友人（牧水）にみとられて永眠。六月十四日次女房江出生。六月二十日「悲しき玩具」東雲堂から出版。

妻節子二人の遺児と函館に帰る。翌大正二年五月五日　肺結核で二十八歳をもって永眠。

《思　郷》

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

盛岡の中学校
露台の
欄干に最一度我をよらしめ

よく叱る師ありき
ひげの似たるより山羊と名づけて
口真似もしき

○富田小一郎

わが姿のむかしの願ひ
音楽のことにかかりき
今はうたわず

小学の首席を我と争ひし
友のいとなむ
木賃宿かな

○工藤千代治

わが村に
初めてイエス・クリストの道を説きたる
若き女かな

○上野さめ子

小奴といひし女の
やはらかき
耳たぼなども忘れがたかり

○小　奴

三味線の糸のきれしを
火事のごと騒ぐ子ありき
大雪の夜に

○市　子

わが室に女泣きしを
小説のなかの事かと

おもひ出づるを

○梅川ミサホ
（小山）

○石狩の都の外の
君が家
りんごの花の散りてやあらむ

○石狩の空知郡の
牧場のお嫁さんより送り来し
バタかな

○橋　智恵子

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆるときなし

わがあとを追ひ来て
知れる人もなき

辺土に住みし母と妻かな
（函館）
ふるさとのなまりなつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きに行く

○宮崎郁雨

函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌
矢ぐるまの花

演習のひまにわざわざ
汽車に乗りて
訪ひ来し友とのめる酒かな

大川の水の面をみるごとに
郁雨よ
君のなやみを思ふ

1＊＊＊1

アカシヤのなみきにポプラに
秋の風
吹くがかなしと日記に残れり

石狩の美国といへる停車場の
さくに乾してありし
赤き布片かな　（美唄）

かなしきは小樽の町よ
歌ふことなき人々の
声の荒さや

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな

さいはての駅に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき

○釧　路

十月の朝の空気に
あたらしく
児扱ひそめし赤坊のあり

夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ児を抱けるかな

以上「一握の砂」より

◎「悲しき玩具より」

二晩おきに
夜の一時頃に切通しの坂を上りしもー
勤めなればかな

新しき明日の来るを信ずといふ
自分の言葉に
うそはなけれどー

百姓の多くは酒をやめしといふ
もっと困らば
何をやめるらむ。

そんならば生命が欲しくないのかと
医者に言われて
だまりし心

ポロオヂンといふ露国亜名が
何故ともなく
幾度も思ひ出さるる日

○ピータ・クロポトキン

その親にも
　親の親にも似るなかれー
かく汝が父は思へるぞ子よ。

○長女　京　子

放たれし女のごとく
わが妻の　振舞ふ日なり
ダリアを見入る

ねこを飼はば
そのねこがまた争ひの種となるらむ
かなしき我が家

茶まで断ちて
わが平復を祈りたまふ
母の今日また何か怒れる

買いおきし
薬つきたる朝に来し
友のなさけの為替のかなしさ。

森　鷗外

文久　二年　一　一月十九日、石見国（島根県）津和野に生まれた。森林太郎。鷗外漁史。千朶山房主人。観潮楼主人。と号す。父静男。母峰子。家は代々藩主亀井氏の典医であった。

明治　五年　一一　父と上京。西周邸に寄寓。ドイツ語を進文学社で学ぶ。

六年　一二　東京医学校予科入学。願書には万延元年生れとした。以後公にこれを用いる。

一〇年　一六　東京大学医学部本科生となる。

一四年　二〇　大学卒業（七月）　陸軍軍医副任官、東京陸軍病院勤務。

一五年　二一　陸軍軍医本部課僚。プロシヤ陸軍衛生制度調査に従う。

一七年　二三　八月　ドイツ留学　十月ベルリン着。ライプチヒへ移りホフマン教授の指導を受ける。

二一年　二七　近衛軍団の大隊で軍隊医務に従う。（三月ー七月）九月帰国　軍医学校教官

二二年　二八　八月新声社訳（於母影）発表。十月「しらがみ草紙」創刊　海軍中将赤松則良の長女登志子と結婚。

二三年　二九　一月「舞姫」発表　九月、長男於菟（おと）生まる。登志子と離婚。

二四年　三〇　八月　医学博士。九月「しらがみ草紙」に　山房論文ー坪内逍遙との没理想論想がはじまる。

二五年　三一　慶応義塾大学講師（審美学）七月創作・翻訳集「美奈和集（水沫集）」刊

二七年　三三　清国開戦（八月）　十月第二軍兵站軍医部長として出動。「しらがみ草紙」廃刊

二九年　三五　陸大教官。（一月）「めさまし草」創刊

三〇年　三六　一月公衆医事会設立

三一年　三七　十月　近衛師団軍医部長兼軍医学校長。

三二年　三八　第十二師団軍医部長　小倉へ下る。（六月）　暖流（かくしながし）の匿名を用いる

三二年　三九　一月「鷗外漁史とは誰ぞ」

三四年　四〇　一月「即興詩人」「翻訳完成

三五年　四一　第一師団軍医部長　帰京「めさまし草」廃刊「万年草」創刊　判事荒木博臣次女しげと再婚

三七年　四三　二月　日露開戦。三月　第二軍軍医部長で従軍　玉　両浦嶼篋ー　王匣両浦島

三九年　四五　一月　帰還　第一師団軍医部長・軍医学校長

四〇年　四六　十一月　陸軍軍医総監・陸軍省医務局長　九月　二男　不律（ふりつ）生

四一年　四七　五月　臨時仮名遣調査委員。　二月　二男不律死亡

四二年　四八　七月　文学博士　一月「明星」脱退の木下杢太郎・吉井勇らにより「スバル」（　）創刊）

ヰタ・セクスアリス・鶏等を発表　海外文芸消息「椋鳥通信」連載　五月　二女杏奴（あんぬ）生

四三年　四九　三月「スバル」に「青年」連載

四四年　五〇　「雁」・「灰燼」・「妄想」

四五年　五一　七月　明治天皇崩御　九月　乃木大将殉死　十月　殉死小説「興津弥五右衛門の遺書」　歴史小説創作

大正　二年　五二　一月　「阿部一族」　スバル廃刊

三年　五三　十一月　従三位　安井夫人　曾我兄弟

四年　五四　四月　勲一等授与　「山椒大夫」「歴史其儘と歴離れ」

五年　五五　四月　依願予備役仰付けらる。「高瀬舟」「寒山拾得」

六年　五六　十二月　帝室博物館総長兼図書頭

八年　五八　帝国美術院長（七月）（明治四十年から　文部省美術展覧会ー日展前身ーの美術審査委員）

一〇年　六〇　臨時国語調査会長　「元号考」起稿　第二期「明星」創刊　「古い手帳」連載。

一一年　六一　七月九日午前七時歿（肺結核、萎縮腎）（六月十五日から休養）　七月六日　遺言　友人　賀古鶴所に筆記させる

明治二十三年一月　「国民之友」ー「舞姫」　（北部　ベルリン）

ドイツ記念三部作　〃　八月　「しらがみ草紙」ー「うたかたの記」　（南部　ミュンヘン）

明治二十四年一月　「新　百種」ー「文づかひ」　（中部　ドレスデン）

「妄　想」　明治四十四年　三田文学　三月・四月に発表

生まれてから今日まで、自分は何をしているか。始終何物かに策うたれ駆られているように学問ということにあくせくしている。これは自分に或る働きが出来るように、自分を為上げるのだと思っている。其目的は幾分か達せられるかも知れない。併し自分のしている事は、役者が舞台へ出て、或る役を勤めているに過ぎないように感ぜられる。策うたれてばかりいる為に、その何者かが醒覚する暇がないように感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏勉強する留学生というのが、その役である。赤く黒く塗られている顔をいつか洗って一寸舞台から降りて、静かに自分というものを考えて見たい。背後の何物かの面目をのぞいて見たいと思い思いしながら、舞台監督のむちを背中に受けて、役から役を勤め続けている。此役が即ち生だとは考えられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思われる。併し、その或る物は目を醒まそう醒まそうと思いながら、又してはうとうととしてねむってしまう。此頃折々切実に感ずる故郷の恋しさなんぞも、浮草が波にゆられて遠い処へ行って浮いているのに、どうかすると、そのゆれるのが根に響くような感じであるが、これは舞台でしている役の感じではない。併しそんな感じは一寸頭を挙げるかと思うと、直ぐ引っ込んでしまう。

歴史其儘と歴史離れ

大正四年一月　「心の花」　記載

なぜそうしたかと云うと、其動機は簡単である。わたくしは史料を調べて見て、其中にうかがわれる「自然」を尊重する念を発したそしてみだりに変更するのがいやになった。これが一つである。わたくしは又現存の人が、自家の生活をありの儘に書くのを見て現在がありの儘に書いて好いなら、過去も書いて好い筈だと思った。これが二つである。

わたくしのあの類の作品が、他の物と違う点は巧拙は別として種々あろうが、其中核は右に陳べた点にあると、わたくしは思う。

友人中には、他人は「情」を以て物を取り扱うのに、わたくしは「智」を以って扱うと云った人もある。しかし、これはわたくしの作品全体に渡った事で、歴史上人物を取り扱った作品に限ってはいない。わたくしの作品は概してデイオニジッシュでなくってアポロ

ニッシュなのだ。わたくしはまだ作品をデイオニジッシュにしようとして努力したことはない。わたくしが多少努力した事があるとすれば、それは只観照的ならしめようとする努力のみである。

わたくしは歴史の「自然」を変更することを嫌って、知らず識らず歴史にしばられた。

わたくしは此縛の下にあえぎ苦しんだ、そしてこれを脱せようと思った。

「高　瀬　舟」　　大正四年一月　中央公論掲載

「高瀬舟縁起」

徳川時代には京都の罪人が遠島を言い渡されると、高瀬舟で大阪へ廻されたそうである。そして護送して行く京都町奉行府の同心が悲しい話ばかり聞かせられる。或るとき此舟に載せられた兄弟殺しの科（とが）を犯した男が、少しも悲しがっていなかった。其仔細を尋ねると、これまで食を得ることに困っていたのに、遠島を言い渡された時、銅銭二百文を貰ったが、銭を使わずに持っているのは始だと答えた。又人殺しの科はどうして犯したかと問えば、兄弟は西陣に傭われて、空引きと云うことをしていたが、給料が少くて、暮しが立ち兼ねた。其内同胞が自殺を謀ったが、死に切れなかった、そこで、同胞が所詮助からぬから殺してくれと頼むので殺して遣ったと云った。

流人ー喜　助　　同心ー羽田庄兵衛

○　財産というものの観念　　○　ユウタナジイ「安楽死」

「翁　草」　（神原貞幹・京都町奉行与力を勤めた幕吏の随筆）

或時一人の流人公命を承ると否世に嬉しげに、船に乗てもいささかも愁へる色不見、守護の同心是を見て卑賤の者ながらよく覚悟せりと感心して、船中にて彼者に対して称嘆するに、彼云く「常に僅の営に渇渇かゆをすすりて、露命をつなぎしに、此御吟味に逢候てより、久々在牢の内、結構なる御養ひを戴き、いたずらに遊び暮し冥加なき上に、剰へ此度島目二百文下されて島へ遣はさる事、如何なる果報にて如此なりや、是迄二百文の銭をかため持たること、生涯に覚え申さず、如程過分の元手有之候へば、たとへ鬼ある島なりとも、一つ身のしのぎはいか様にも出来可申候。素より妻子親類とてもなく、苦しき世をわたり兼候へば、都に名残は更になく候」とて悦ぶこと限りなし。

庄兵衛の心の中には、いろいろに考えて見た末に、自分より上のものの判断に任す外ないと云う念、オオトリテエに従う外ないという念が生じた。

庄兵衛はお奉行様の判断を其儘自分の判断にしようと思ったのである。そうは思っても、庄兵衛はまだどこやらにふに落ちぬものが残っているので、なんだか、お奉行様に聞いてみたくてならなかった。

次第に更けて行くおぼろ夜に、沈黙の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべって行った。

夏目漱石

慶応　三　一　一月五日　東京市牛込区喜久井町に生まる。夏目直克・千枝の五男。本名　金之助。
明治　三　四　新宿塩原家の養子となる。
　　四　五　塩原家、浅草諏訪町移転。種痘から疱瘡を病む。
　　七　八　浅草寿町戸田小学校入学
　　九　一〇　牛込実家にもどる。市ケ谷小に転ず。
　　一一　一二　神田錦華小にはいり、卒業す。
　　一二　一三　東京府立第一中学入学
　　一四　一五　母死亡　中学をやめ、漢学二松学舎に一年ほど在学。
　　一六　一七　予備門入学のため成立学舎に学ぶ
　　一七　一八　大学予備門（後の第一高等中学）入学
　　一九　二〇　第一高等中学校と改称。予科三年本科二年本所江東義塾教師
　　二一　二二　塩原家より復籍。本科一年進級英文科志望
　　二二　二三　正岡子規と交友。漱石の雅号を用う。漢詩文・俳句創作
　　二三　二四　一高を卒業　東京帝国大学英文科入学
　　二四　二五　初恋。厭世主義におちいる。
　　二五　二六　東京専門学校講師。子規と松山方面旅行
　　二六　二七　東大英文科卒業。大学院にはいり、東京高師で英語担当
　　二七　二八　小石川法蔵院下宿。鎌倉の帰源院で参禅。
　　二八　二九　愛媛県尋常中学校（松山中学）に赴任俳句を作る。
　　二九　三〇　熊本第五高等学校転任。中根重一郎長女鏡子と結婚。

おいたち

学生時代

松山時代

明治三〇　三一　父直克死亡　山川信次郎と小天温泉へ遊ぶ　熊本時代

三二　三三　長女筆子生まる。山川と阿蘇登山

三三　三四　英国留学

三四　三五　次女恒子生まる。「倫敦消息」五・六月「ホトトギス」載「文学論」とりはじめ。　留学時代

三五　三六　神経衰弱に悩む。スコットランド旅行。子規没の報に接す。（九月十九日死亡）

三六　三七　帰国。本郷区駒込千駄木町に居住。東京帝大文科大学。一高講師。三女栄子生まる。「神経衰弱再発」

三七　三八　明治大学講師　大学講師時代

三八　三九　十月「吾輩は猫である」上篇大倉書店刊行　四女愛子生まる。

一月「ホトトギス」載「吾輩は猫である」。帝国文学「倫敦塔」

三九　四〇　四月「ホトトギス」「坊っちゃん」・八月「猫」（十一）完結　九月「新小説」「草枕」

十月「中央公論」二百十日　十一月「猫」中篇出版　本郷区西片町転住

四〇　四一　一月「ホトトギス」「野分」発表。大学・一高講師辞任。朝日新聞入社。　朝日新聞時代

長男純一生まる。六月「猫」下篇出版。六月ー十月　朝日連載「虞美人草」。早稲田南町移転。

四一　四二　一月ー四月　朝日連載「坑夫」　一月「虞美人草」春陽堂刊行

九月ー十二月「三四郎」連載朝日。次男伸六生まる。

四二　四三　五月「三四郎」春陽堂刊　六月ー十月「それから」朝日連載、胃カタールにかかる。

九月ー十月　満韓旅行。十二月「それから」春陽堂刊行

四三　四四　三月ー六月「門」朝日連載　五女雛子生まる。六月胃潰瘍で入院。八月修善寺吐血重態

十月帰京入院。

四四　四五　一月「門」春陽堂刊行。二月退院　文学博士号授与拒絶。八月　朝日講演会　大阪で胃潰瘍再発

入院　九月ぢ手術。五女死亡。

四五　四六　一月ー四月「彼岸過迄」朝日連載。七月明治天皇崩御。九月「彼岸過迄」春陽堂刊行。

大正　一　十二月「行人」朝日連載始む。
二　四七　三月　三度胃潰瘍就床。四月「行人」掲載中止。九月より再連載。十一月完結。
三　四八　一月　「行人」大倉書店刊行。四月ー八月「心」朝日連載。九月・四月胃潰瘍就床。
十月「心」岩波書店刊行。
四　四九　一月ー二月「硝子戸の中」朝日連載。三月京都旅行。五度胃潰瘍で就床　四月岩波書店より刊行。
六月ー九月「道草」朝日連載。十月岩波書店刊行。
十一月　湯ヶ原行
五　五〇　一月ー二月　リュウマチで湯ヶ原に滞在。糖尿病からの痛みと後で判明。
五月二十五日から「明暗」朝日連載。
十一月二十二日　六度胃潰瘍となる。
十二月九日午前六時四十分永眠。遺骸は医科大学で解剖。
十二月十二日　青山斉場で葬儀。戒名　「文献院古道漱石居士」
十二月十四日　「明暗」の連載中断。

上　明治三十八・十　三四郎　明治四十二・五　○彼岸過迄　大正一・九
吾輩は猫である　中　明治三十九・十一　それから　明治四十二・一　行人　大正三・一
下　明治四十・六　門　明治四十四・一　心　大正三・十
坊っちゃん　明治三十九・四　ホトトギス載　硝子戸の中　大正四・四
○草枕　明治三十九・九　新小説　道草　大正四・十
二百十日　明治三十九・十　中央公論　明暗（未稿）
明治四十一・一
○虞美人草　明治四十一　朝日連載
坑夫

「鶏　頭」　夏目漱石

高浜虚子の小説集　明治四十一年一月刊行

「風流懺法」・「いかるが物語」をはじめ約十編の小設集

二種の小説とは、余裕のある小説と、余裕のない小説である。余裕のある小説というのは、名の示すごとく、迫らない小説である。「非常」という字を避けた小説である。不断着の小説である。この間にはやったことばを拝借すると、ある人のいわゆる触れるとか触れぬとかいうちで触れない小説である。無論触れるとか触れないとかいう字があいまいであって、しかも余は世間の人の用いる通り好い加減な意味で用いているのだから、この字に対して明らかな責任は持たないつもりである。ただある人々の唱える意味において触れない小説といったら一番はやわかりするだろうと思ってあいまいながらわざわざこの字面を拝借したのである。というものは、まず字の定義はお互いの間に黙契があるとして、ある人々は触れなければ小説にならないと考えている。だから余はとくに触れない小説という一種の範囲をこしらえて、触れない小説もまた、触れた小説と同じく存在の権利があるのみならず、同等の成功を収め得るものだと主張するのである。

触れない小説の意味をもう少し説明しないと余の所存が貫徹しまいと思う。余は自己の考えを述べて、こんな風にも小説は解釈が出来るものだと読者から認めてもらえばよい。けんかを売る料簡でもなし、売られたけんかを買う気もない。従って思う通りに述べて誤解のないように努めておかなければならない。

文章に低徊趣味という一種がある。これは便宜のための余の製造したことばであるから、他人にはわかりようがなかろうが、まず一口にいうと、一事に即し、一物に倒して独特もしくは連想の興味を起して、左から眺めたり右から眺めたりして容易に去りがたいという風な趣味を指すのである。だから、低徊趣味といわないで依々趣味、恋々趣味といってもよい。ところが、この趣味は名前のあらわすごとく出来るだけ長く一つ所に佇立する趣味であるから、一方からいえば容易に進行せぬ趣味である。換言すれば余裕がある人でなければ出来ない趣味である。

低徊趣味　余裕をもって、こせこせしない気分で、人生のいろいろな現象を眺めようとする趣味。

草　　枕

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に桿させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生まれて、画が出来る。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向こう三軒両隣にちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどかくつろげて、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩を引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画である。あるは音楽と彫刻である。こまかに言えば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。

枕石漱流　　石ニ枕シ　流ニ漱グ　　自然を友として親しむ生活

漱石枕流　　「中国の孫楚」　　普通のゆきかたを　わざと逆にとる。

則天去私　　夏目漱石

大正五年　晩秋の「木曜会」の席上で語られたと伝えられている。漱石の著作・日記にはみえない。漱石が晩年に到達した人生観、理想的境地。

天の法則通りになるより外に仕方はなかった。（中略）代助は最後の権威は自己にあるものと腹のうちで定めた。

……それから　一四

僕は是で天然自然の積なんですからね。奥さんよりも余程技巧は少ないと思ってるんです。……明暗　八六

僕自身は始めから無目的だといふ事を知って置いて頂きたいのです。然し天には目的があるかも知れません。さうして其目的が僕を動かしてゐるかも知れません。それに動かされる事が又僕の本望かも知れません。……明暗・八六

技巧は天に負けるのである。（中略）自然に任せて置くがいいといふ方針が最上だといふ事に帰着する。……断片・大正四

私の個人主義

（大正二年）

「……それで私は常から斯う考へてゐます。第一に貴方がたは自分の個性が発展出来るような場所に尻を落ち付けべく、自分とぴったり合った仕事を発見する迄まい進しなければ一生の不幸であると。然し自分がそれ丈の個性を尊重し得るやうに、社会から許されるならば、他人に対しても其個性を認めて、彼等の傾向を尊重するのが理の当然となって来るでせう。それが必要でかつ正しい事としか私には見えません。」

書簡

大正四年六月

武者小路さん。気にいらない事しゃくに障る事、憤がいすべき事は、塵芥の如く沢山あります。それを清める事は人間の力で出来ません。それと戦ふよりもそれをゆるす事が人間として立派なものならば、出来る丈けそちらの方の修業をお互いにしたいと思ひますがどうでせう。」

志賀直哉

個人主義の道徳

明治四四年三月　　武者小路実篤

「自分は個人主義者である。さうして自己も他人も同じく一個の人と見る。自分は自分を一個の人間として尊重するやうに他人をも亦一個の人間として尊重する。自分は他人の犠牲になることを欲しない。同時に他人を自分の犠牲にしやうとは思はない。自分は自分の幸福と快楽を尊重する。それと同時に他人の幸福と快楽を尊重する。」

自分と他人

明治四十三年七月

自分は他人に冷淡なことを感謝する。

他人の自分に冷淡なことを感謝する。

他人を愛するとも、他人のことを心配するとも、他人の運命をいかんともすることのできない自分にとって他人のことに冷淡になり得るのは恵みである。

他人に自分のことを干渉されることの嫌いな自分にとって他人の自分に冷淡なことは恵みである。

（中略）

自分の願うところは一人の恋人と、少数の友人と、接する時にのみ淡い嬉しさを感ずる多数の同趣味者を有することである。

自分の運命と恋人の運命をいっしょにしたい。そうして友人の運命と時々むすびつけたい。そうして多数の同趣味者とは、ただ旅の道づれでありたい。

換言すると自分と恋人が中心の合奏をし、友がそれをたすけ、同趣味の人がそれをつよめてくれることを望むのである。絵にすれば自分と恋人が中心の人物になって副人物に友がなって、背景に同趣味者を持ってきたいのである。

「白　樺」　明治四十三年四月　創刊　大正十二年八月　廃刊　百六十冊　学習院大学図書館所蔵

前期　明治四十三年ー大正二年　確立期

中期　大正三年ー大正　七年　黄金時代　武者小路が「新しき村」を提唱同志とともに日向に移住

後期　大正八年ー大正十二年　老境時代　文壇の主流は「新現実派」の手へ移った。

「白樺派グループ」

第一……武者小路実篤・長与善郎・倉田百三ー理　想　派

白樺派の先導者ー武者小路実篤

個と全　個人と人類　との完全な調和に対する個有の信仰にもとずく人道主義

初期代表作「お目度たき人」（明治四十四年）ー少女に恋した男のお目出たさ、人生肯定の明かるさ

中期　「幸福者」（大正七年）ー「新しき村」を建設した頃の心情

円熟期　「第三の隠者の運命」（大正十一年）ー「武者小路の目指す「理想図」の構図」人生・恋愛の解決

第二……有島武郎

愛と理想とを目指すも、社会的なものへの関心が色こくつきまとっていた。歴史と社会とに厳しく制約されている人間という存在の、理性と感性とのいたましい相こくの姿ー第一・第三のグループと相違。「宣言」（大正四年）「カインの末裔」（大正六年）「生れ出づる悩み」（大正七年）　長編「或る女」（明治四十四年ー大正八年）

第三……志賀直哉・里見　弴　白樺派の現実派

「志賀直哉」……反自然主義的なものとしてよりは、かえって自然主義の伝統に立つ「私小説」の最高峰

「里見　弴」……有島武郎・生馬の末弟、明治二十一年出生。作風は白樺派中最も享楽的色彩が濃い。男女間の心理描写にすぐれた手腕を示す。

「晩い初恋」（大正四年）「善心悪心」（大正五年）「妻を買う経験」（大正五年）

大正八年白樺派と別れて久米正雄に近づいて行った。

長編「多情仏心」（大正十一年ー大正十二年）　※（有島武郎は別）

白樺派の理想主義……歴史や社会を勇敢に切り捨てた所に成立した。ー歴史的・社会的なものへの関心の完全な欠除。

○理想への情熱　個性の存分の拡大は豊かで自由であった。

○自然主義ー日常生活の金しばりにあった貧しい不自由な生

日本の文壇に社会意識の急激に高まった関東大震災（大正十二年）を期に急速に終結していた。

「白樺の運動は、自然の意志、人類の意志を尊重して、個人がいかに生きるべきかを探求する運動なのである。」

「各自、自分のかける範囲をできるだけ完全に書くこと、他人がかけることは他人に任せること。実感を重んじ、うそは見えないところまで良心するどく排斥すること、実感こそ無限の深さを暗示するものだ。本気になってかけることを書くこと、全力を出し切れる材料にのみぶつかること。内からかくこと。外からつくったものはかかない。内面的な真実からは離れないこと。」

「白樺の運動」ー武者小路実篤

白樺派の天才主義ー選ばれたるものといふ自負ー特権意識

志賀直哉

明治一六　一　二月二十日　父直温母銀の二男として出生。宮城県石巻町。兄直行は前年三才で死去。

一八　三　父母と上京。麹町区内幸町一の六　父方の祖父母の家に入る。祖父直道は相馬家の家令。祖母は留免　内幸町の家は、相馬家の旧藩邸

二二　七　学習院初等科入学

二三　八　祖父相馬家の家令を退き、一家は芝公園五十一号地に移る。

二八　一三　学習院初等科から中等科に進む。八月三十日　母銀死去。三十三才。秋義母浩を迎える。

明治三三　一八　夏、内村鑑三を訪れ、以後七年間師事する。
三五　二〇　中等科卒業の折、再び（明治三十一年十六才四年進級落第）　落第　武者小路実篤と同級となる。
三六　二一　高等科に進む
三七　二二　小説家志望。「菜の花と小娘」を書く。
三九　二四　一月祖父直道死去　東京帝国大学文科大学英文科入学
四〇　二五　夏　自家の女中と結婚を決意し、父・祖母・義母と争う。夏山形方面に遊ぶ。内村鑑三のもとを去る。
四一　二六　国文科に転ずる。武者小路実篤・正親町公和・木下利玄と回覧雑誌「望野」を創刊。
※四三　二八　有島武郎・生馬・里見弴・武者小路実篤・木下利玄・正親町公和・児島喜久雄・柳宗悦と雑誌白樺　創刊　四月
「網走まで」―大学を退学　六月「剃刀」を発表　十二月市川の砲兵十六連隊入営　九日後免除。
四五　三〇　「大津順吉」中央公論　初稿料を得。単身広島県尾道に行き「暗夜行路」の前身「時任謙作」を書き始む。
大正　二　三一　一月「清兵衛と瓢箪」読売新聞。八月山手線事故。養生に兵庫県城の崎温泉に行く。漱石　朝日連載を依頼
三　三二　十二月十日　勘解由小路　康（さだ）と結婚　東京市外衣笠村に住む。
四　三三　千葉県我孫子弁天山に住む。
五　三四　武者小路実篤も我孫子に来住。
七　三六　武者小路「新しき村」建設のため我孫子を去る。
八　三七　四月「白樺」十周年記念号発行。「中央公論」に「憐れな男」（暗夜行路　前編終章）を発表

暗　夜　行　路　　大正十年一月―昭和十二年四月
前篇　　四部　六十五章
大正十年　一月　序　詞・第一部　一章から七章まで
二月　八章から十章まで

三月　十一・十二章（第一部了）　第二部　一・二章
四月　三章から六章前半まで
五月　六章後半から八章まで
六月　九・十章
八月　十一章から十四章まで（前篇完結）

後篇

大正十一年
一月　第三部　一章から五章まで
二月　〃　六章から九章まで
三月　〃　十章から十二章前半まで
八月　〃　十二章後半から十四章まで
九月　〃　十五・十六章
十月　〃　十七・十八章
一月　〃　十九章

大正十二年
大正十五年
十一月　第四部　一・二章
十二月　〃　三章

昭和　二年
一月　〃　四・五章
二月　〃　六章
三月　〃　七章前半
九月　〃　七章後半・八章
十月　〃　九・十章
十一月　〃　十章（改訂）から十二章
十二月　〃　十三章前半

「時任謙作」
大正元年　尾道で書き始め
大正三年　挫折。
「夏目漱石のすすめによる執筆」
直哉の全作品の一大集成
直哉の全生活

昭和　三年　一月　第四部　十三章後半と十四章
六月　〃　十五章
四月　〃　十六章から二十章まで（後篇完結）
十二年

「創作余談」　昭和三年改造社版　現代日本文学全集　第二十五巻「志賀直哉集」巻末　解説

「続創作余談」　昭和十三年　改造社版「志賀直哉全集」全九巻　第九巻の巻末　付加

「前期」……「戦う人」　自分の気持にあくまで忠実であろうとする。自分の気持を圧迫しようとするすべてのものに向って勇敢に戦いをいどんだ態度

（明治四十一年一月「或る朝」―大正三・四・五年の空白の時期まで）

明治四十一年「或る朝」「網走まで」。

明治四十二年「鳥尾の病気」

四十三年「剃刀」「彼と六つ上の女」「速夫の妹」

四十四年「老人」「濁った顔」

四十五年「祖母のために」「母の死と新しい母」「憶ひ出した事」「クローディアスの日記」

大正　二年「清兵衛と瓢箪」「異津」「出来事」「范の犯罪」

大正　三年「児を盗む話」「寓居」

「中期」……「動から静へ」　大正六年から昭和三年まで　昭和四・五・六・七・八年第二の空白期

（静かなる調和を求める）

「城の崎にて」「佐々木の場合」「好人物の夫婦」「赤西蠣太」「和解」（大六）「十一月三日午後の事」（大七）「憐れな男」「暗夜行路」（前篇最終章）「流行感冒」（大八）「小僧の神様」「謙作の追憶」（序詞）「或男、その姉の死」「雪の日」「焚火」「真鶴」（大九）「暗夜行路前篇」（大十）「暗夜行路後篇」（大十一）「雨蛙」「転生」（十三）「濠端の住まい」

「冬の往来」「瑣事」（大十四）「山科の追憶」「痴情」「晩秋」（大十五）「山形」「沓掛にて」「邦子」（昭和二）「豊年虫」「雪の速足」「鳥取」（昭三）

大正十二年　我孫子ー京都栗田口ー山科　　大正十三年ー昭和十三年　奈良在住

「後　期」…「眺める人」　社会も思想も眺められる対象ー身辺随想　昭和九年以降

「万暦赤絵」（八）「日曜日」「朝昼晩」「菰野」（九年）「暗夜行路完結篇」「青臭帖」「身辺記」（十二）「続創作余談」（十三）「早春の旅」「淋しき生涯」「内村鑑三先生の思ひ出」（十六）「灰色の月」（二十一）「蝕まれた友情」（二十二）「太宰治の死」（二十三）「老夫婦」「動物小品」「秋風」「奇人脱哉」（二十四）「山鳴」「末っ子」「昨夜の夢」（二十五）「妙な夢」「朝の試写会」「自転車」（二十六）「朝顔」（二十八）「いたずら」（二十九）「草津温泉」「夫婦」（三十）「白い線」「祖父」「待合室」「八手の花」（三十一）随想談話集「夕陽」（三十五）「盲目浮木」（三十八）

川端康成

私が初めて伊豆へ行ったのは、「伊豆の踊子」に書いた旅で、二十の時だった。「伊豆の踊り子」の草稿「湯河島での思い出」には（私は二十歳だった。高等学校の二年に進んだばかりの半ばで、上京してからの初めての旅らしい旅だった。）と書いている。（全集第六巻あとがき）

大正七年から昭和二年まで　毎年湯ケ島温泉の湯本館に半年ほど滞在

二十歳　二十九歳

「私は伊豆にも思い出を懐いている。思い出であれば、感傷もいい。この湯ケ島は今の私の第二の故郷と思われる。」

「湯ケ島での思い出」抄

私が二十歳の時、旅芸人と五六日の旅をして、純情になり、別れて涙を流したのも、あながち踊り子に対する感傷ばかりではなかった。…幼少から、世間並みでなく、不幸に不自然に育って来た私は、そのためにかたくななゆがんだ人間になって、いじけた心を小さな殻に閉じ籠らせていると信じ、それを苦に病んでいた。人の好意を、こんな人間の私に対しても一入ありがたく感じて来た。

私は高等学校の寮生活が一二年の間ばひどく嫌だった。中学五年の時の寄宿舎と勝手がちがったからである。そして私の幼少年時代が残した精神の病患ばかりが気になって、自分を憐れむ念と自分を厭う念とに堪えられなかった。それで伊豆へ行った。

旅情と、また大阪平野の田舎しか知らない私に、伊豆の田舎の風光とが私の心をゆるめた。そして踊り子に会った。いわゆる旅芸人根情などとは似もつかない、野の匂いがある正直な好意を私は見せられた。いい人だと、踊り子が言って兄嫁が肯った一言が、私の心にぱたりと清々しく落ちかかった。……（中略）……平俗な意味での、いい人ということばが私には明りであった……（中略）……下田の宿の窓敷居でも、汽船の中でも、いい人と踊り子に言われた満足と、いい人と言った踊り子に対する感謝とで、こころよい涙を流したのである。

◎　自己憐憫と自己嫌悪からの回復

「伊豆の踊子」抄

道がつづら折りになっていよいよ天城峠に近づいたと思うころ、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さでふもとから私を追って来た。

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺がすりの着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。ひとり伊豆の旅に出てから四日目のことだった。修善寺温泉に一夜泊まり、湯ヶ島温泉に二夜泊まり、そしてほう歯の高げたで天城を登って来たのだった。重なり合った山々や原生林や深いけい谷の秋に見ほれながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲った急な坂道をかけ登った。ようやく峠の北口の茶屋にたどりついてほっとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまった。あまりに期待がみごとに的中したからである。そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。

突っ立っている私を見た踊り子がすぐに自分の座ぶとんを外して裏返しに傍へ置いた。

「ええ…。」とだけ言って、私はその上に腰を下ろした。

道の向う側に沢山ある篠竹の束を見て、杖に丁度いいなぞと話しながら、私と栄吉とは一足先きに立った。踊り子が走って追っかけて来た。自分の背よりも長い太い竹を持っていた。

「どうするんだ」と栄吉が聞くと、ちょっとまごつきながら私に竹を突きつけた。

「杖にあげます。一番太いのを抜いて来た。」

「駄目だよ。太いのは盗んだと直ぐ分って、見られると悪いじゃないか。返して来い。」

踊り子は竹束のところまで引返すと、また走って来た。今度は中指くらいの太さの竹を私にくれた。そして、田のあぜに背中を打ちつけるように倒れかかって、苦しそうな息をしながら女達を待っていた。

私と栄吉とは絶えず五六間先きを歩いていた。

「それは抜いて金歯を入れさえすればなんでもないわ。」と踊り子の声がふと私の耳にはいったので振り返って見ると踊り子は千代子と並んで歩き、おふくろと百合子がそれに少し後れていた。私の振り返ったのを気づかないらしく千代子が言った。

「それはそう。そう知らしてあげたらどう。」

私の噂らしい。千代子が私の歯並びの悪いことを言ったので、踊子が金歯を持ち出したのだろう。顔の話らしいが、それが苦にもな

らないし、聞耳を立てる気にもならない程に、私は親しい気持になっているのだった。暫く低い声が続いてから踊子の言うのが聞えた。

「いい人ね。」

「それはそう、いい人らしい。」

「ほんとにいい人ね。いい人はいいね。」

この物言いは単純で明けっ放しな響を持っていた。感情の傾きをぽいと効く投げ出して見せた声だった。私自身にも自分をいい人だと素直に感じることが出来た。はればれと眼を上げて明るい山々を眺めた。まぶたの裏が微かに痛んだ。

二十歳の私は自分の性質が孤児根性でゆがんでいると厳しい反省を重ね、その息苦しい憂うつに堪え切れないで伊豆の旅に出て来ているのだった。だから、世間尋常の意味で自分がいい人に見えることは、言いようなく有難いのだった。山々の明るいのは下田の海が近いからだった。私はさっきの竹の杖を振り回しながら秋草の頭を切った。

途中、ところどころの村の入口に立札があった。

―物乞い旅芸人村に入るべからず。

栄吉（二十四歳）その妻千代子（十九歳）

千代子の母―四十女

栄吉の妹「薫」―踊子（十四歳）

雇い女　百合子―（十七歳）

大正一四年一月・二月「文芸時代」発表

明治三三　一　六月十一日　大阪市天満此花町で出生。父栄吉、開業医。母げん。姉芳子。

三三　二　父死去

三四　三　母死去。父死後、母の実家大阪府西成郡豊里村に住む。後、祖父母と原籍地大阪府三島郡豊川村に帰る。

三九　八　豊川村小学校入学　祖母死去、以後十年ばかり祖父と二人暮らし。（二・三年後姉死亡。三歳で別れて、生前一度しか会わずに終わる。）

大正　三　一六　五月祖父死去（七五歳）（「十六歳の日記」大正十四年発表）孤児となり、母方の実家、豊里村の伯父に引

とられて、大阪府立茨木中学へ通学。

大正　六　一九　三月茨木中卒業　浅草蔵前の従兄の家に寄宿。明大予備校通学。浅草公園に遊ぶ。九月一高一部乙（英文）入学

九　二二　東京帝大英文科入学

一〇　二三　第六次新思潮刊行　今東光もグループ（二月）　四月　国文科に転科

一三　二六　東大国文科卒

禽　獣

夏などは、客間のテエブルの上のガラス鉢に、緋目高や鯉の子を放して

「僕は年のせいか、男と合うのがだんだんいやになってきてね。男っていやなもんだね。直ぐこっちが疲れる。飯を食うのも、旅行するのも、相手はやっぱり女に限るね。」

「結婚したらいいじゃないか。」

「それもね。薄情そうに見える女の方がいいんだから、だめだよ。こいつは薄情だなと思いながら、知らん顔でつきあってるのが、結局一番楽だね。女中もなるべく薄情そうなのを雇うことにしている。」

「そういうんだから、動物を飼うんだろう。」

「動物はなかなか薄情じゃない。一自分の傍にいつも、なにか生きて動いてるものがいてくれないと、さびしくてやりきれんからさ」

そんなことをうわのそらでいいながら、彼はガラスばちの中の色とりどりの鯉の子が、その遊泳につれて、うろこの光のいろいろに変るのをつくづく見ながら、こんな狭い水中にも微妙な光の世界があると、客のことなど忘れてしまっているのだった。

昭和八年七月「改造」発表

雪　国

昭和一〇年　一月　「夕景色の鏡」　文芸春秋　昭和一〇年十一月　「物　語」　日本評論

一月　「白い朝の鏡」　改　造　十二月　「徒　労」

昭和一一年八月　「萱の花」　中央公論　　昭和一五年十二月　「雪中火事」　公論
一二　十月　「火の枕」　文芸春秋　　二一　五月　「雪国抄」　暁鐘
一二　五月　「毛毬歌」　改造　　二二　十月　「続雪国抄」　小説新潮

（前後１３年）

推敲

夕景色の鏡

○　悲しいほど美しい声であった。高い響きのまゝ雪から木魂して来さうだった。

○　ラッセルを三台備へた、国境の山だった。

雪国

○　悲しいほど美しい声であった。高い響きのまま夜の雪から木魂して来さうだった。

○　ラッセルを三台備へて雪を待つ、国境の山だった。

「夕景色の鏡」

濡れた髪を指でさわった。ーその触感をなによりも覚えている。その一つだけがなまなましく思ひ出されると、島村は女に告げたくて、汽車に乗った旅であった。

「雪国」

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。
向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓をおとした。雪の冷気が流れこんだ。

三味線師匠の養女　駒子　　現実の国
師匠の息子　　国境
息子の恋人　葉子　　架空の国　　半現実・半架空

「踏みこたえた目を上げた途端。さあと音をたてて天の河が島村のなかへ流れ落ちるようであった。」　「雪国の完末」

芥川竜之介

明治二五　一　三月一日東京市京橋区入船町に新原敏三の長男として出生。実母ふく発狂後芥川家の養子となる。
三一　七　江東小学校に入学
三五　一一　実母ふく死去。級友と回覧雑誌「日の出界」発刊
三八　一四　江東小学校卒業　府立三中に入学
四三　一九　府立三中卒　一高一部乙に無試験入学。新宿二丁目七一番地に転居
四四　二〇　一高の寮に入る。
大正　二　二二　一高卒　東京帝国大学英文科入学　府下豊島郡滝野川町字田端四三五番地転居
三　二三　処女作「老年」発表ー五月
四　二四　九月「羅生門」発表。漱石山房の「木曜会」に出席　その門下となる。
五　二五　二月　久米正雄・松岡譲・成瀬正一・菊地寛とともに第四次「新思潮」を発刊　「鼻」を発表
七月　東大英文科卒業　九月「芋粥」を発表　横須賀の海軍機関学校嘱託教官となる。鎌倉に転居
十二月夏目漱石死去
六　二六　四月・六月「偸盗」発表　九月「或日の大石内蔵之助」発表　九月　鎌倉より横須賀に転居
五月　第一創作集「羅生門」上梓。六月　出版記念会「羅生門の会」催さる。十二月　第二創作集。
「煙草と悪魔」上梓。
七　二七　二月塚本文子と結婚。二月から大阪毎日新聞社社友となる。三月新居を鎌倉に移す。五月「くもの糸」
「地獄変」　八月「奉教人の死」　十月「枯野抄」を発表
八　二八　一月　第三創作集「傀儡師」を上梓。三月、海機嘱託を辞任。大阪毎日新聞社社員となる。実父新原敏三死去。
四月　鎌倉から再び田端の自宅に転ず。
五月　「竜」「密柑」「沼池」を発表

大正　九　二九　一月　第四創作集「影燈籠」を上梓　三月長男比呂子出生。四月「秋」　七月「南京の基督」「杜子春」発表

一〇　三〇　一月「山鴫」発表。三月「第五創作集」「夜来の花」上梓。大阪毎日新聞社海外視察員として中国を周遊。

一一　三一　一月「藪の中」　三月「トロッコ」を発表　五月　第一随筆集「点心」上梓　五ー九月「お富の貞操」を発表

八月選集「沙羅の花」上梓。八月「六の宮の姫君」発表　十一月次男多加志出生。健康衰える。

一二　三二　三月湯河原に湯治。五月「第六創作集」「春服」上梓。八月鎌倉に避暑。九月　関東大震災（被害なし）

一三　三三　七月第七創作集「黄雀風」上梓。九月　第二随筆集「百草」

一四　三四　三男也寸志出生。ー七月　健康悪化。

一五　三五　一月　湯河原に湯治。「湖南の扇」発表　四月　鵠沼で療養生活に入る。

十月　第三随筆集「梅・馬・鶯」を上梓。

昭和　二　三六　一月　義兄の西川豊宅全焼。　放火の嫌疑をかけられた豊の自殺後、西川家の整理にあたる。

一・二月「玄鶴山房」　三月「河童」発表。

四月ー八月　「改造」紙上で谷崎潤一郎と論争。

六月　第八創作集「湖南の扇」上梓。

七月二十四日　田端の自宅で服毒自殺。

十月　遺稿「歯車」「或阿呆の一生」発表

十二月　随想集「侏儒の言葉」刊行。

堀　辰　雄

明治三七　一　十二月二八日　東京市麹町区平河町五の五に出生。父浜之助は広島県士族。維新後上京。裁判所勤務。国許に妻こう（大正三年七月没）あるも子供はなかった。辰雄は堀家の嗣子となる。生母は西村志気。没落商家の娘。

三九　三　妻こうの上京により、生母志気とともに、向島区小梅町の母の妹の家をたよる。

四〇　四　向島土手下の家に母・祖母・辰雄とささやかな生活。煙草小売商をやった。

四一　五　母志気・向島区須崎町の上条松吉（彫金師）に辰雄を連れて嫁す。

四三　七　向島区新小梅町二の一の水戸屋敷に移り、養父銅工場を立つ。四月実父浜之助死亡。

四四　八　向島区牛島小学校入学

大正　六　一四　三月　右小学校卒　府立三中入学数学を好む。

一〇　一八　中学四修で一高理科乙類入学

一二　二〇　三中校長広瀬氏に連れられ、田端の室生犀星を訪れる。八月犀星に伴われて、軽井沢に滞在。九月震災。家焼失。生母死亡。父と葛飾四ツ木村に仮住い。犀星の紹介で田端に住む芥川竜之介を訪れる（十月）初冬の頃から胸を病む。休学。

一三　二一　焼跡に新築父と住む。七月全快帰省の犀星を訪ね、八月帰路、軽井沢に芥川を訪ね帰京、校友会誌にエッセイ詩を掲載しはじめる。

一四　二二　四月　東大文学部国文科入学

一五　二三　昭和元年三月「風葉」を「山繭」に発表。四月中野重治・窪川鶴次郎らと雑誌（同人）「驢馬」刊行

昭和　二　二四　七月　芥川の死に会い。激しい衝動を受ける。九月「芥川竜之介全集」編集に従事（三年七月まで）十二月肋膜炎をおこし、死に瀕した。三年四月まで休学。

三　二五　四月湯河原で静養。五月「驢馬」十二号で廃刊。八月末軽井沢に行く。

四　二六　卒論「芥川竜之介論」　十月横光利一・川端康成・永井竜男らと同人雑誌「文学」を第一書房より刊行。

昭和　五　二七　十月喀血して病臥　十一月「聖家族」を「改造」に発表

六　二八　四月、信州富士見のサナトリウムに入院六月末退院。八月軽井沢行。十月帰京。病状悪化絶対安静。

七　二九　「花を持てる女」（初稿）を「文学界」に発表　九月定期的発熱により一ヶ月臥床

八　三〇　「美しき村」を執筆

※九　三一　「美しき村」野田書房から刊行（四月）　十一月「物語の女」を山本書房から刊行

※九月矢野綾子と婚約

※一〇　三二　矢野綾子に付きそい、富士見のサナトリウムにはいる。この秋創作欲おこる。「物語の女」の構想を練るも成功せず、十二月六日綾子死亡。

一一　三三　九月から十月にかけて「風立ちぬ」（「序曲」「風立ちぬ」）執筆　十一月「冬」（「風立ちぬ」の一章）執筆

十二月「風立ちぬ」の終章として一編の鎮魂歌（レクイエム）を書こうとして追分に冬を越すも成功しなかった。「風立ちぬ」を「改造」に発表

一二　三四　四月「婚約」（春）と改題ー「風立ちぬ」の一章を新女苑に発表。王朝文学に親しむ。

六月　京都旅行　竜見院に約一ヶ月滞在　大和にも遊ぶ。七月帰京直ぐに追分にもどる。十一月「かげろふの日記」（九月から執筆）を脱稿。十一月十九日油屋旅館火災のため「かげろふ日記」続編のノート類焼失。軽井沢の川端康成の家に寄寓。十二月「死のかげの谷」（風立ちぬ終章）を書く。

「かげろふ日記」を「改造」に発表。

一三　三五　一月帰京。二月　鎌倉で喀血入院。三月「死のかげの谷」を「新潮」に発表。「風立ちぬ」完結。

四月前年知り合った加藤多恵子と結婚。下旬軽井沢愛宕山の水源地近くに新居を構える。

「風立ちぬ」を野田書房から刊行。九月「幼年時代」を「むらさき」に連載（十四年四月まで）

十月「かげろふの日記」続編の稿を起こす。下旬逗子の山下三郎別宅に移居。十二月養父上条松吉死去。

一四　三六　二月「ほととぎす」（「かげろふの日記」続編）を「文芸春秋」に発表。五月　神西清とともに、一〇日間ほど奈良に遊ぶ。六月「かげろふの日記」を創元社から刊行。

一五　三七　杉並区成宗に新築の住居を構える。六月追分に行き「姨捨」を書き「文芸春秋」七月号に発表

一六　三八　「菜穂子」を「中央公論」に発表。四月軽井沢に別荘を求める。八月「姨捨記」（「更科日記」と改題）を「文学界」に発表。一（四月、更科の里に姨捨山を見に行く。）十二月奈良行。

一七　三九　十月追分に行き病臥

一八　四〇　夏から十一月上旬まで軽井沢在　その間リルケを読む。十六年十月以降の旅取材「大和路、信濃路」を「婦人公論」（一月―八月号）連載

一九　四一　三月数回にわたり喀血　五月まで絶対安静　六月軽井沢に移る。九月追分の油屋旅館の隣に転居「曠野」（「十六年十一月執筆「改造」十二月号発表）を甲鳥書林から刊行。

二〇　四二　療養に専念

二三　四五　九月折口信夫宛ての書簡にもとづく「三つの手紙」（その二）は「古代感愛集」読後」と改題」を「表現」に発表

二五　四七　八月高熱重態　十一月頃より脳貧血を生ずる。

二六　四八　七月　追分に新築した家に移る

二七　四九　療養に専念

二八　五〇　五月二十八日午前一時一〇分多恵子夫人にみとられながら永眠。

「風立ちぬ」―連載小説（順位）

「序曲」（雑誌では序）　「改造」　昭和十一年十二月号

「風立ちぬ」　「文芸春秋」　昭和十二年一月号

「冬」　昭和十三年四月　「風立ちぬ」（五百部限定）野田書房

「春」（原題は「婚約」）　「新苑」　昭和十二年三月号

「死のかげの谷」　「新潮」　昭和十三年三月号

死があたかも一つの季節を開いたかのやうだった。　「聖家族」　昭和五年十月執筆

昭和五年十一月号「改造」

死人の家への道には、自動車の混雑が次第に増加して行った。……それは三月だった。空気はまだ、冷たかったが、もうそんなに呼吸しにくくはなかった。

それを見ながら、さっきからこの青年と九鬼とは何処がこんなに似ているのだろうと考へてゐた細木夫人はやっとその類似点を彼女独特の方法で発見した。　―　まるで　九鬼を裏がへしたような青年だ。

生きているものと死んでゐるものとは、一銭銅貨の表と裏のやうに、非常に遠く、しかも、非常に近いのだ。「死の素描」

私たちの田舎ずまいは、一銭銅貨の表と裏のやうに、いろんな家畜小屋と背中合はせだった。　「麦藁帽子」

僕らは夢を裏返しにされた現実としか考へないのだ。―　「詩人も計算する」

※表と裏　―　「表の合計と裏の合計と一致しない調和」

……死んだ九鬼が自分の裏側にたえず生きてゐて、いまだに自分を力強く支配してゐることを、そして、それに気づかなかったことが自分の生の乱雑さの原因であったことを。　中　略

……その漂流物のなかには、一ぴきの小さな犬の死骸が混ってゐた。さうしてそれが意地のわるい彼にときどき白い歯でかまれたり、裏がへしにされたりするのを、扁理はぢっと見入りながら、次第にいきいきと自分の心臓の鼓動するのを感じ出してゐた……

草むらの中に何かがばったり倒れる物音を私達は耳にした。それは私達がそこに置っぱなしにしてあった絵が、画架と共に、倒れた音らしかった。すぐ立ち上って行かうとするお前を、私はいまの一瞬の何物をも失ふまいとするかのように無理に引き留めて、私のそばから離さないでゐた。お前は、私のするがままにさせてゐた。

風立ちぬ、いざ生きめやも。

ふと口を衝いて出て来たそんな詩句を、私は私にもたれてゐるお前の肩に手をかけながら、口の裡で繰り返してゐた。

（風立ちぬ　序曲）

さうして翌年の春になり、それまで張りつめていた自分の気持が急に弛むと、私は何かいひしれぬ空虚な気もちに襲はれ、それから脱れるために、ひたすら心を日本の古い美しさに向けだした。さうしておもに王朝文学に親んだ。六月には、生まれてはじめて京都へも往って、そこの古い寺の一室でひと月ばかり暮らしたりした。（「風立ちぬ」あとがき）

※昭和十二年　京都百万遍竜見院（智恩寺山内）ー六月約一ケ月在

※「或女友達に」ー「七つの手紙」（昭和十二年九月十一日　軽井沢にてー十二月三十一日追分にて）

実を云ふと、私はこんどの仕事には、さういふ手紙や日記を残していった昔の不幸な恋人たちの一人を取り上げて見たいのです。さう、まあ、王朝時代のものなら申分ありませんが、その頃の不幸な婦人たちの残していった多数の日記や家集のうちに、それを私がちよっと換骨奪胎しただけで、そのまま私の好みの物語になってくれるものがありはしないのか？　第一信

◎　月のすごいほどいい、荒涼とした古い信濃の里が当時の京の女たちには彼女たちの花やかに見えるその日暮しのすぐ裏側にある生の真相の象徴として考えられてゐたに違ひなく　「姨捨記」十六年六月

林　芙美子

明治三六　一　十二月三十一日　山口県下関市田中町の間借りの部屋に生まる。本名フミコ「鉄力屋の二階」
父　宮田麻太郎　行商人　愛媛県周桑郡の人　二十二歳
母　林キク　鹿児島県東桜島故里温泉　自炊温泉旅宿　林小次郎の義姉　三十六歳（父親の異なる三人の子を既産）
母方の私生児として届出る。
四三　七　九州若松に在居。父麻太郎芸者を家に迎える。そのため母キク芙美子を連れて宮田家を出る。
四四　八　行商人　沢井喜三郎と芙美子を連れ子して結婚。（岡山県の農家の長男）以後芙美子の養父となる。
長崎の勝山小学校入学　暮れに佐世保の八幡小学校に転校
佐賀　鹿児島　熊本　若松　久留米　直方　折尾　戸畑　門司　下関　尾道　以上十三校
大正　二　一〇　鹿児島　キクの実家にあずけられる。祖母につらくあたられる。異父姉ヒデと対照的、商売不振のため
九州から本州へ　尾道市で下車　以後ここに落つく
四　一二
五　一三　広島県　尾道市立第二小学校五年に転入学　二年遅れの過年児童　帆縫工場・女中　アルバイトによる苦学
七　一五　四月　尾道市立高等女学校（現　東高等学校）入学　《図書館で文学書をあさる
一一　一九　三月　高女卒業　友人岡野軍一を頼って上京。（因島出身　明大商科在学）
一二　二〇　岡野軍一　明大卒業とともに故郷　因島の日立造船所へ就職　芙美子を捨てて帰る。（軍一の姉の反対で結婚ができない。）
芙美子　職遍歴がはじまる。　風呂屋下足番　小学新報社の封帯書き、作家近松秋江の女中
母上京ともに神楽坂・鳴子坂・道玄坂で露天商（夜店）　この頃より　日記―「放浪記」の母体
九月一日　震災　酒屋の便船で関西、尾道にあそぶ。―「風琴と魚の町」を書きはじめる。
※　父親も上京していた。
「娘時代の思い出多い　持光寺の石段を上り、青磁の海を眺める」

一三　二一　上京。職遍歴再開　新劇俳優田辺若男と同棲（田辺に愛人あるため数ヶ月で別る）
田辺の紹介でアナーキな詩人ー岡本潤　壺井繁治　辻潤　萩原恭次郎と交わる。本郷南天堂に出入す。
一四　二二　友谷静栄と同人雑誌「二人」を出版　詩人野村吉哉と一緒になる。玉川瀬田ー太子堂で同棲する。
野村に愛人ができて翌年別離。
昭和　元年二三　野村と別れ、平林たい子の下宿（本郷）にころがりこむ。画を修業中の手塚緑敏と知り合い十二月その誠実な人柄にひかれて結婚（手塚とは同年）
一二　二四　一月高円寺　五月　和田堀の内妙法寺内浅加園にうつる。貧しいが夫との静かな生活、尾道・高松へ旅行
三　二五　十月　夫緑敏応召　三上於菟吉（大衆作家）の推薦で「女人芸術」二号に詩　三号から「放浪記」を連載
※「女人芸術」三上の妻　長谷川時雨主宰の雑誌
四　二六　六月　友人　松下林学博士夫人の文子の援助で　処女詩集「蒼馬を見たり」を刊行　雑誌社より原稿依頼多し。
改造十月号　「九州炭坑街放浪記」を掲載
◎　五　二七　徳田秋声の推賞により、六月改造社より「新鋭文学叢書」の一巻として「放浪記」刊行。六十万部の売行を示すベストセラーとなる　十一月「続放浪記」
《一月　台湾旅行　五月上落合三輪に転居》　秋　大陸旅行ーハルビン　長春　奉天　撫順　金州　三十三里
青島　上海　南京　杭州　蘇州　二ヶ月の旅程
六　二八　朝日夕刊　「浅春譜」（一月五日ー二月五日）三月「風琴と魚の町」を改造十一月「清貧の書」を改造
満州事変　（プーシキンの「オネーギンに感激して執筆）　秋ヨーロッパへパリ在（シベリア経由）
七　二九　一月ー二月　在ロンドン　五月帰国の途につく。ナポリー上海
上海事変　魯迅と上海で交遊　短冊をもらう。秋下落合に転居（家賃五十円）四季変化の自然境による作品
「わが住む界隈」「庭」「花」「落合町山川記」を結唱す。欧州滞在中作品ー「小区」「屋根裏の椅子」
八　三〇　共産党に寄付約束「アカハタ」購読により「シンパ」とみなされ中野署に九日間留置
九　三一　四月「鶯」（養父を取材）改造に発表。朝日夕刊「泣虫小僧」（九月ー十月）

昭和一〇　三二　客観小説「牡蠣」（かき）中央公論に発表九月。十一月出版記念会。
一一　三三　「稲妻」（実母の体験を骨子）昭和十一年一月ー七月・九月「文芸」連載
毎日新聞主催国立公園早回り競争参加（九月十五日ー十月二十七日）途中　実父　宮田麻太郎と対面
夫緑敏の後をおって渡満　旅行を楽しむ。（下落合に土地購入）
一二　三四　「林芙美子選集」改造社（七巻）刊行　日華事変により従軍　十二月南京陥落に女流一番乗り（毎日のトラック）
一三　三五　漢口入城（朝日トラック）　従軍記「北岸部隊」「戦線」　夫緑敏応召
一四　三六　一月より「朝日新聞」に「波濤」連載　講演会　従軍報告会
一五　三七　朝鮮へ講演旅行
一六　三八　夏　新築の家に転居
一七　三九　南方報導班員となる。仏印　シンガポール　ジャワ　ボルネオに八ケ月滞在。※　後の「浮雲」の舞台
一八　四〇　産院から赤児をもらい、養子とする。「泰」と名づく。溺愛する（昭和二十四年「匂い菫」に表わす）
一九　四一　泰と母と上林温泉　角間温泉に疎開　童話執筆「狐物語」他七十編
二〇　四二　終戦　上京
二一　四三　反戦作品「吹雪」を「人間」創刊号、「雨」を「新潮」に発表　文壇復帰
二二　四四　「うず潮」八月ー十一月　毎日新聞連載。「放浪記」第三部作を刊行（戦時中削除の部分）
二三　四五　「晩菊」別冊文芸春秋に発表
二四　四六　「浮雲」を「風雪」（二十四・十一ー二十五・八）「文学界」（二十五・九ー二十六・四）（心臓弁膜症診断）
「晩菊」に対し「日本女流文学者会賞」を受ける。　※　文壇の自己保存
二五　四七　「茶色の眼」（二十・一ー二十五・九）完結　四月九州、屋久島に旅行
二六　四八　「めし」朝日新聞（三月ー六月中絶）　六月二十八日「主婦の友」主催「名物食べ歩き」に参加
十一時発作　二十九日一時永眠
戒名「純徳院芙蓉清美大姉」

林芙美子追悼特集号　文学界　昭和二十六・八　「日本文学アルバム　林芙美子」　和田芳忠編

「林芙美子」　板垣直子著　角川文庫　昭和三十一年　（筑摩書房　昭和三十一年刊）

花のいのちは
みじかくて
苦しきことのみ
多かりき

林　芙美子

「東京へ初めて連れて行ったのもあの男、信じてゐていゝと言ったあの人の言葉が胸に来る。」　―放浪記―

「何が信ずるものでござんかだ。自分の事が信じられなくてたとへイエスであろうと、お釈迦様であろうと、貧しい者は信ずるヨユウなんかないのだ。」

「いったい革命とはどこを吹いてゐる風なのか……中々うまい言葉を沢山知っている。日本の自由主義者よ。日本の社会主義者は、いったいどんなお伽話を空想してゐるのでせうか。？」

「私は無政府主義者だ。こんなきゆうくつな政治なんてまっぴらごめんだ。人間と自然がたはむれて……中略……それでよいではございませんか。」

「私の気質から云へば　ひどく正反対で、平凡で誇張のない男」　―清貧の書―（夫緑敏）

「小説を書いてゐると恋びとが待ってくれてゐるように愉しくなる。娘の頃から書を読むことが好きであったが、こんな愉しさがあったからこそ、自殺もせずに無事に来たのだと思う。私はいったい楽天家でしめっぽい事がきらいだが、そのくせ孤独を全我としてゐる私の文学はあこがれ飢ゑることによって、ここまで来たやうな気がする。いまでも私の目標は、常に飢ゑ、常にあこがれることだ。」

ー 文学・旅・その他ー　昭和九年

※ いい仕事といい旅　三昧境にひたる

自伝的色彩　ー　客観的写真

袋物の職人と旅館女中をしていた妻との暗い転落の詩集

母親のたどった遍歴の姿（三人娘と男の子　異父）

「牡　蠣」（十年九月　中央公論）

「稲　妻」（「文芸」十一年一月より連載）

「稲　妻」（「文芸」十一年一月より連載）

「名もなき雑草は地球上のどこにでも生ひ繁ってゐる。有名な高価な草木には、私はあまり興味がない。市井のありふれた生活の交響楽みたいなものが書けたら本望なのだけれど。」　ー「長編小説集創作ノート」ー

「一抹の死愁が潮のやうに、時々私の胸に塩っぽく寄せて来る。」

「その日は三十二、三キロも私は歩いてゐたであろう。小舎のそとでは味方の野砲が夕方からさかんに河向うのき水の町を攻撃してゐた。いんいんと鳴ってゐる砲の音をききながら、私は急に生命の消えゆくような胴震ひを感じた。」「歴世」

漢国攻略　稲葉部隊従軍記

「神は近くにありながら、その神を手さぐりでゐる。私自身の生きのもどかしさを、この作品に描きたかったのだ。社会の道徳感が人の世を滅すための審判にのみ役立ち、此の二十世紀はますます疲れて来てゐる感じである。一切の幻滅の底に行きついてしまって、そこから再び萌え出るもの、それがこの作品の題目であり、「浮雲」といふ題が生れた。　ー　浮雲　あとがき　ー

墨田区立あずま図書館
〒131-0044 墨田区文花1丁目19番1号

★いちばんあとの日までにおかえしください。

でんわ612-6048
あずまとしょかん

墨田区立図書館
31642488 6